真剣でサスケ（偽）に恋しなさい。

体は大人！！心は中二！！

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オンラインゲームにて廃課金の上位プレイヤーとして名をそれなりに馳せていた会社員の男。

彼は新たに導入された転生システムを利用し、アバターの容姿を変更した。

するとなんて事でしょう……。

彼は童貞のまま、赤ん坊になってしまったのです。

これは、オタク会社員が忍んでいない忍として仲間たちと活躍する愛と勇気の物語である。

だいたいこんな感じです。
※注意事項。
この作品にはオリ主による過激な報復行為などの表現がございます。
もし、御覧になる場合はそのことを念頭に置いて、御覧ください。
気に入らない。つまらない等の感想を抱いたらすぐにプラザバックすることをお勧め致します。
最後に、私の優柔不断に付き合わせてしまった読者様、申し訳ございませんでした。
今後はぶれる事なく、自分の書きたいもの書くように致しますので。
私の書く未熟な作品ですが、応援していただければとてもうれしく思います。

目次

プロローグ 1
1話 15
2話 22
3話 39
4話 57
5話 79
6話 97
7話 106
8話 117
本当の始まり 125
プロローグ
1話 135
2話 146
3話 158
4話 171
5話 182

プロローグ

俺は転生した。

ＮＡＲＵＴＯのネットゲームでアバターを転生システムで転生させたら俺自身が転生した。

なんだこれ？ワンクリック詐欺どころじゃねぇぞ！

責任者を出せ!!運営を呼べ!!抗議するぞ!!

まあ、運営どころか講義なんて赤子の俺には不可能なんですがね。

こうなったらチートしてやる!!強くてニューゲームだ!!

モテモテのウハウハになってやるぜ!!

「あらあら、サスケちゃんは元気ね」

「そうだな。

もしかしたらこの子がうちは最強瞳術である『写輪眼』を開眼出来るかもしれないな」

なんですと？

ワンクリックでポジティブな赤子が誕生した家は『うちは』。

赤子の名はサスケと名付けられた。

彼の転生システムを利用したアバターは金と時間を注ぎまくり制作された
サスケそっくりのうちは一族のアバターである。
故に彼はアバターのうちはサスケとしてうちは一族に転生したのであった。
ただし、彼本人はアバターとは思っておらず外の世界を知るまでは一族が虐殺されるハードな人生にビビりまくって、普通の子供よりも滅茶苦茶おねしょした。

――――――。

五歳になった俺は幼稚園はいかず、うちは一族の歴史の勉強と修行をしていた。
日本においてうちは一族は当然ながら創作ではなく実在する名家に名を連ねる一族である。
うちはの歴史は戦いの歴史。
戦国の時代から第二次世界大戦まで、天皇に仕えて日本を守り続けた現代日本でも有名な英雄の一族らしい。
沖縄で核爆弾を投下されはしたが、黒き炎≪天照≫で空中爆破。
沖縄の街を直撃から回避した伝説を持つ。

他にも日露戦争においては敵を目の前で消し去ったりと、都市伝説のような話題には尽きない。

そんな最強の一族であるうちはの活躍によって日本は勝利はしなかったが善戦した。

しかし、善戦した事で俺の知る歴史よりも多くの日本人が戦争の犠牲となった事で後の歴史家達は原爆の直撃から日本を救ったうちは英雄派と、戦争を長引かせたうちは戦犯派に別れているらしい。

まあ善戦したおかげで、講和条件も初めに要求されたものよりもだいぶ緩和されたし、戦犯とみているのはごく一部の歴史家と中国と韓国の人々ぐらいだろう。

実際にあったか分からないが南京大虐殺も行ったのが、日本軍ではなくうちは一族になっているし……。

戦争の影響で人口が減った日本は講和条約を結んで降伏した後、一夫多妻制度の法律を作り日本の人口再生計画に乗り出した。

この制度のお陰で日本にベビーラッシュが到来、人口も世界大戦前まで回復した。

一定の人口を満たした日本はゆっくりと一夫一妻の時代へと突入し、昭和が終わるころには一夫多妻制度はカビの生え、完全に放置されていたのだが……。

しかし、現在の日本は少子高齢化社会となり、それを何とかする為に一夫多妻制度の

認知活動及び、見直しが始まった。
現代までこの夢の様な法律が消えなかったのは、ハーレムを夢見る先人たちの血と涙の頑張りのおかげだったらしい。
先人たちの凄まじい執念を感じる。
この見直しにより、今までは取得する必要のなかった重婚許可書を取得せねばならない。
重婚許可書とは読んで字のごとく、国が重婚を許可しますという重要書類の事である。
この書類を受け取る為に二つの条件を満たさなければならない。
もう一人の妻を娶る際に本妻の許可・新しい妻の両親、もしくは養父養母の許可。
これらすべての確認を市役所の職員がして、初めて発行される
この二つの条件を満たすのは尋常ではない。
本妻の説得も当然至難の業であるが、一番厳しいのは新しい妻となる女性の家族の許可だ。
既に結婚している男に対する新しい妻の家族は当たり前のように冷ややかだ。
幾ら高収入高学歴の優良物件な男でも、自分の娘がないが蔑ろにするのではないか？
などのその他諸々の理由で許可を取ることが出来ずに二人は破局。

そもそも、付き合う以前の問題で結婚している事を正直に言わなくてはならないので、告白した瞬間に振られるケースが多い。

結婚の有無を女性に最後まで伝えることなく重婚許可書の取得段階に至った場合は、常識的に詐欺罪で逮捕される。

それらを無事にクリアし、相手の親まで許可に行く所まで行ったら、その男性はネット社会で神のごとく崇め奉られ、中には『モテモテ男』なる本をネットで販売している男もいる。

嘘か本当かは分からないが……。

そして、当然であるが男性が結婚している事を知っていた状態であっても、重婚許可書がないと肉体関係を結んでしまった場合は即座に浮気として離婚と高額な慰謝料を請求が待っている。

手をつないだり一緒に酒を飲む程度は許されるらしい。

まあ、奥さんと離婚するかの話は別だが……。

まとめると現代日本でも重婚できるけど弁護士に医者や政治家にプロ野球選手などの職業について何人の奥さんを養える社会的立場にある人間か、将来が保証されている財閥の御曹司に人柄のいいハーレムラブコメの主人公のような人間にしか取得できない物なのだ。

うちはの歴史の本読んでいたが途中でポイした俺は新聞紙の少子高齢化社会への対策について書かれた記事を読み、ニヤリと笑う。

まあ、あれですね？もしもの為に備えるのは悪くない事ですよね？日本を救う事に繋がるしね？

一人の女性を愛して人生が終わるのか分からないし……失敗してもサラリーマンだった頃よりも高収入な仕事に付く事は出来るだろうし？

新聞をしまった俺は、参考書をめちゃくちゃ漁った。

☆☆☆

参考書を読みながらふと思う。

写輪眼を開眼する人間が少ないからと言って、開眼を促す為に子供を稚園に行かせず勉強と修行を行えとか、狂っているのではないだろうか？

我が家は力が正義だからな……どこのワーストワンの家だ？

俺が開眼したと知られたらどうなるんだろうか？

考えるまでもなく日常が修行で埋まりますね。

しかし、いつかバラすんだったら、開眼イベントなんかしてサスケプレイがしたいな。
かっこいい事は大人から子供になっても大好きです。
中二はたまりませんな。
前の俺は小学校や中学生では真面目なムッツリだったからな…今生は楽しく生きたい。
まずは…成績優秀だろ？彼女だろ？金だろ？
「ふむ、水面歩行も早く習得したな。
さすが俺の子だ……兄弟の中では一番早い速度だぞ」
楽しく生きる妄想をしていると修行を監督していた親父殿が俺を褒める。
うちはの屋敷の庭にある池で行われた水面歩行の修行。
分家と宗家の子供たちが習得するスピードの最速記録を叩き出した事でいつも厳つい表情の親父殿も顔がにやける。
俺も褒めてもらってうれしいっちゃ、嬉しいのだが……。
「サスケのヤツ。生意気だな」
「弟の癖に…」
「クソガキが……」
修行風景を見ていた異母兄弟の兄貴達の親父殿そっくりの顔面から放たれる視線が

キツイ。

兄達もうちは一族として宗家の血を引くエリートなのだが、俺はその上を行くアバター能力を引き継ぐ転生者。

子供の彼らにはとても勝ち目のないチートボーイなのだが……そんな事を知らない彼らは俺の才能であると思い、妬みまくっているのだ。

故に……。

「おら、サスケ。便所掃除しろや」

「床掃除もな」

「風呂掃除もやってくれや」

このような嫌がらせも日常茶飯事なわけだ。

しかし、俺は大人だ。

彼らの気持ちも分かる。

さすがに暴力を振るわれたら殴り返すつもりだが、それ以外だったらまだ許容範囲だ。

そう、俺は大人。

「ふむ……『おっぱいフェス!!揺れる乳は夢のカーニバル!!』か。

父上の趣味も中々だな。

新しい巨乳ものが増えてるし、まさに乳上だ」

だから、親父殿の部屋に隠してあるエロ本も読んでも問題ないのだ。

―三十分後―

ふむ。中々のお点前でした。

エロ本を読み終わり、頭の中で乳と戯れていると廊下から足音を察知した。

まずい!!!乳上だ!じゃなかった親父殿だ!!

急いで戻さないと!!

アバターのステータスを引き継いだサスケによる神速の手さばきにより、瞬時に収納されたエロ本達。

サスケはカモフラージュの為に小難しい本を適当に取り出し読書する。

その間まさに数秒の出来事。

第三者が彼の動き見ていたら黄色い閃光のようだと言われていたかもしれない。

そして、部屋の主であるうちは一族当主のおっぱい親父が自室に帰って来た。

「…サスケ。本が読みたいのなら一言断ってから入りなさい」

「すみません父上」

部屋に入っていたのが勉強熱心で優秀な息子では仕方がないなと、簡単な注意に、反

省した表情で謝るサスケ。
彼のカモフラージュは完璧であった。
しかし、彼は重大なミスを犯した。
そう、それは……。
「サ、サスケ……お前、写輪眼を開眼したのか？」
オッパイをじっくりとよく観察する為に使っていた写輪眼が開眼しっぱなしだったのだ。
もし、当主が数秒間早く、到着していたらサスケはオッパイで開眼した変態として、うちはの歴史に名を刻んだ事だろう。
「さすが俺の子だ」
だが、その未来は訪れず、うちはサスケは写輪眼保有者として準人間国宝に登録され、武術世界・忍世界に大きく名を轟かせた。
あっれぇぇぇぇぇぇ!!?俺の開眼イベントはぁぁぁぁぁぁぁぁ!!??
この後、一人でめちゃくちゃ泣いた。

☆☆☆

家族から赤飯を焚いて貰い。写輪眼の開眼を祝ってもらって、数年の時が経過した俺は小学生デビューを果たした。

そんな俺の日常は修行→学校→修行→寝る。

まるで僧侶のような生活であった。

しかし！影分身を身代わりに修行を抜け出し、河原でエロ本収集が日課になった俺。

そんな俺にも友達が出来たのだ。

「小雪…最近どうだ？」

「うん！サスケのおかげで毎日が楽しいよ。

お母さんも優しくなって、今度一緒にご飯を食べるんだ!!」

白い髪と赤い瞳を持つアルビノな幼女、小雪はＤＶを受けていた。

はじめは友達と激しいケンカに負けたのかと思ったのだが、話を聞いても誤魔化すばかり。

気になった俺は写輪眼で小雪の記憶を読み、ＤＶの事実を知ったのだ。

熟女もロリもいける俺は、紳士として二人を救わなければと思い小雪ママを写輪眼で真人間にしたのだ。

だが、真人間にするだけでは再びＤＶは起こる。

それを防ぐために収入がそれなりに良い就職先を探し、見事に貧乏から脱出でき、幼女小雪はニコニコと毎日をエンジョイしている。
「所で小雪、その紙はなんだ?」
「これ?この間みた子たちが『風間ファミリーは最強だ!!』って言いながら遊んでいたのを見て
僕も名前を考えてみたんだよ」
「ほう…」
『こゆきファミリー』『こゆきぐんだん』『こゆきとゆかいななかまたち』『こゆきバスターズ』
『こゆきレンジャーズ』
全ての名前に小雪の名前が記入されている。
俺は下っ端か?下っ端なのか?
そのどや顔はなに?かわいいな、ペロペロさせてくれませんか?
幼女のどや顔に邪悪な俺が出現しそうなるが、無理やり抑え込み冷静に突っ込んだ。
「却下、一つ目に至ってはパクリだろ」
「え〜〜」
自分の考えたグループ名を却下されてぶーだれる小雪。

俺はそんな小雪にとっておきのグループ名を提案する。
「暁なんてどうだ？」
「きゃっか」
ＮＡＲＵＴＯに登場する渾身のグループ名が幼女に却下された。
あれ？
かっこよくないですか暁？
俺的にはめちゃくちゃナウい名前なんですが？
グループ名に一歩も譲らない俺達。
このままでは時間を無駄にするだけ……。
俺は最終兵器を取り出した
「こゆきぐんだんがいい！」
「マシュマロあげるから」
「今日から僕たちはあかつちだ!!」
「暁な」
チョロイ。
さすが幼女チョロ過ぎる。
俺がポケットから取り出したマシュマロに飛びつき、瞬間的に意見を変える小雪の

チョロさになごみつつも、この子の将来にちょっとの不安を覚えた。
しかし、ここから始まるのだ……
「ところでサスケ、暁は何をするの？遊ぶの？マシュマロ食べるの？」
「俺達、暁は……正義の忍となる」
俺のスターダムな人生はここから始まる!!

1話

正義の忍。
その言葉は幼女小雪のロリハートを打ち抜いた。
「おお！正義の忍……なんかカッコイイ!!」
「じゃあ、修行を始めるぞ」
「おー！」
こうして修行の日々が始まった。
あれ？修行を抜け出した意味がなくね？
まあ、むさくるしい男達よりも幼女と修行だから問題ないな。
むしろ百倍は頑張れる気がする。
……。
「じゃあ、俺は家に帰る」
「バイバーイ」
修行を程よく消化した俺は小雪と別れて、むさくるしい男達の巣窟。
別名『自宅』へと帰った。

隠遁で自室に戻り、影分身の帰りを待っていたのだが……一向に帰ってこない。
影分身の情報と経験が脳内に入ってこない事から未だに消滅していないことは分かっている。
では一体何があったのだろうか？
分身が気になった俺は隠遁の術で姿を消して、屋敷を歩きまわった。
しかし、使用人や分家の人間は見かけても、分身の俺は見当たらない。
まさか、まだ修行しているのか？
そう思った俺は道場の屋根裏に潜入して、小さな穴から中の様子を伺う。
すると……。
「ち、きくしょう!!」
「弟のくせに!!」
「なめんな!!」
ボロボロの兄貴たちと対峙する俺の分身。
どうやら三体一の組手のようだ。
「ふん。雑魚が群れたところで俺には届かん」
「「ぐぁぁぁ!?」」
左右と正面から来る拳と蹴りを受け流し、兄貴たちを同士討ちする分身。

兄貴達は拳と蹴りにチャクラを溜めて攻撃したのか勢いよく道場の壁まで転がって行った。
おいおい、分身さんめっちゃノリノリですやん。
クールに決めてるけどめっちゃ嬉しそうだよ、あれ。
ちょっと変わってくれません？
「この勝負…サスケの勝ちだ」
「父上……約束は分かっているな」
「ああ、お前の一人暮らしを認める」
はぁ!?
何があったの？なんで分身ごときがそんな事を決めてんだよ!!
嘘だと言ってよ、パンティー!!
俺が能内でパニックを起こしている間に分身の俺はクールに立ち去っていく。
「サスケ……気づいてやれなくて済まなかったな」
「……」
シリアスな空気の中、親父殿の言葉を無視して無言で去っていく分身。
間違いない、俺だから分かる。
アイツは今、心の中で俺ってカッケェエエエ!!と思っているに違いない。

分身を追跡し分身がが部屋に入ったのを確認した俺は、後を追うように自室に入る。
「おい、一体何があったんだよ？一人暮らしってどうゆう事だ」
「オリジナルか……まずは本棚を見ろ」
俺を睨みながら本棚を見るように命令する分身。
おいおい、本当に何があったんだ？
分身とはいえ、俺がここまでブチ切れるなんて……。
分身の怒り具合に困惑しつつも、視線を分身から本棚に移す。
そして、俺の頭は真っ白になった。
「は…？へ？」
「これが答えだ」
そう、俺の本棚には沢山の本が収納されていた。
なのに、それがゴッソリと無くなっていた。
何が起こっている？意味が分からない。
「あのクソ兄貴と分家の奴らが芋を焼くのに使いやがったんだ。
幸い中身はバレていないがな」
「ちょっと、ぶち殺してくる」
ふざけんなよ!!あのクソガキ共!!

あれだけの本を集めるのにどれだけ苦労したと思っているんだ!!!
小雪と遊ぶ日を除いて毎日毎日、河原で収集したコレクションになんてことをしやがる!!
俺の怒りのボルテージは最大レベルへと昇華した。
瞳も輪廻写輪眼に変わっているのか、体の中に感じるチャクラが激しく活性化する。
表紙を歴史書と参考書にカモフラージュしていた事で家族バレはなかったが、大事に集めたエロ本の恨みは深い。
ブチ切れたサスケは怒りのままに部屋を出ようとするが……。
「やめろオリジナル。もうアイツらには制裁を下した、これ以上は必要ない」
「お前はあの程度で満足したのか？俺の憎しみはあの程度では満たされない」
輪廻写輪眼で自分を止める分身を睨みながら表面上はカッコイイ会話を繰り広げるオリジナルのサスケと分身のサスケ。
内容がエロ本でなかったらかなりかっこよかっただろう。
「明日を楽しみにしておけ。必ず満足する」
「本当だろうな……。嘘だったら許さんぞ」
「俺はお前だ。きっと満足するだろうさ」
怒りは止まぬが、ここで癇癪を起してもしょうがないと分身の言葉を信じて聞き入れ

る事にした。

☆翌日☆

「ぞ～さん、ぱお～ん♪」
「ケツだけ星人～～♪」
「俺を見ろ!!」
兄貴達は幼稚園児の大英雄の如く、己の下半身を露出させ屋敷を徘徊した。
分家の女性や使用人の女性の悲鳴が屋敷に木霊する。
分身を解除した後、記憶と経験を習得した俺はこの時をカメラを構えて待ちわびた。
兄貴たちは分身の写輪眼によって、二つの暗示を掛けられていたのだ。
一つ、朝になったら下半身を露出しながら徘徊
二つ、下半身が女に反応しなくなる
つまり、兄貴達は毎朝下半身を露出させ、男以外に下半身が反応できない人間になってしまったのだ。
精通もしていない内からこんなことになってしまった兄たちは哀れを誘う。
なので俺は兄貴たちの雄姿を親父殿が大事にしている特殊レンズのお高いデジカメ

で撮影し、ホモサイトに投降してあげた。
これできっとオネエ様方にモテるはずなので将来のお相手は心配ないだろう。
「何をやっとるか、馬鹿息子共がぁあああ!!」
親父殿の怒鳴り声を兄貴達の泣き声をＢＧＭに加工した写真を投稿した俺は、一人暮らしの為の準備を行った。

2話

時々分家の人やオカンが様子を見に来るが、一人暮らしとなった小学生の朝は早い。
朝早くに目を覚まし、修行。
修行が終わればニュースを見ながら優雅に朝食。
うちはサスケはマンションで一人暮らしを満喫していた。
そして、この日はサスケの転校デビューである。
……。
川神小学校。
俺が通うことになる小学校である。
小学校…それはクラスカーストという理不尽な序列とモンスターペアレントが湧き出る魔窟。
少しでも弱点を晒せばすぐにいじめに繋がる地獄のサバイバル。
これに生き残る為には攻撃される材料を作ってはいけない。
勉強も出来、スポーツも出来る。
小学生においてはこの二つが出来ればクラスの頂点に立てるのだ。

まあ、中学生にはいればイケメン度も重要になるのだがそこは心配していない。
今の顔はうちはサスケ様だからな!!
「じゃあ、うちは君。ここが君のクラスだ、いじめもなくみんないい子達だからすぐに仲良くできるよ」
「はい」
「では内海（うつみ）先生、くれぐれも頼みますぞ」
「もちろんです、任せてください。
じゃあ、うちは君は先生が合図したら教室に入ってくるようにね」
校長と担任となる男性、内海教諭にＶＩＰ待遇で案内された俺は先に入った内海教諭。
耳を扉に近づければ内海教諭の声が聞こえる。
「みんな今日は転校生を紹介するぞ!!」
『おおぉーー!!』
「先生、転校生は男ですか?」
「先生女子ですよね!?女子!!」
クラスの中から子供たちの声が響く。
懐かしい。

自分もかつて転校生がやって来た時は、男か女かで一喜一憂したものだ。
「残念ながら転校生は男だ」
「げぇ」
「男かよ」
「賭けに負けちまったぜ」
「隣のクラスの風間達の勝ちかよ……」
転校生は男と聞いて、げんなりする男子。
つーか、賭け事までやるのかよ最近の小学生は……。
まあ、賭けたとしてもオカズやカードだろう……大人のオカズだったら、ちょっと見せてもらいたい。
「じゃあ、そろそろ転校生に入ってきてもらう。」
先生の合図を聞いた俺は、扉を開けて教室の中に入り黒板の前に立つ。
「じゃあ、自己紹介をしてもらおうか」
先生に促され妄想の中で練習した自己紹介を行う。
瞳を鋭く、クールな感じを演出し、声を低いイメージで喉から出す。
「うちは…サスケだ。よろしく頼む」
渾身の自己紹介に心の中でガッツポーズをしていると周りの反応が凍り付いていた。

あれ？外した？痛々しい中二だと思われた？まぁ、事実だけどさ。
一株の不安を覚えていると女子の黄色い声援が巻き起こった。
「カッコイイ！」
「イケメン!!」
「うちはだって!!名門よ名門!!」
「素敵!!」
普通ならこんなアニメや漫画のような反応は帰ってこないだろう。
ただし、それを可能にする存在がいた『イケメン』と『美少女』である。
そして、クラスメイトたちが未だに純粋な小学生であることが一番の要因かもしれない。
対して男子達の反応は冷ややかだ。
男子達の目が訴えている。
『けっ！イケメンが!!』
『泣かしてやる』
『友ちゃんを誘惑しやがって!!このクソ野郎!!』
『なんだろう…この胸の高まりは？
ああ…これが殺意か…』

見事に敵意丸出しである。
「じゃあ、うちは君は後ろの席に座ってくれ」
「分かりました」
先生の指した席まで移動し、机の横にランドセルを掛ける。
「私、高木　友香。よろしくね」
「ああ」
隣の席の女子に素っ気ないクールな挨拶を返す。
俺に挨拶を返された高木は俺とは反対方向を向いた。
表情を隠したいのだろうが、彼女の右手は小さくではあるが渾身のガッツポーズを決めている。
要望に応えることが出来た様で何よりです。
「じゃあ、一時間目の授業は算数な。みんな教科書の六二ページを開くように」
転校生イベントが終了し、授業が始まった。
ふふふふ、ここから更に加速してやるぜ!!
……。
「じゃあ、この問題が出来る者は?」
算数の授業が中盤に差し掛かった所で教諭が問題を解ける人間が居るのかを問いか

けに俺はすかさず手を上げる。
当然上げる者などほとんど居ない。
間違ったら恥ずかしいし、面倒と思う生徒たちが多いからだ。
「おっ、転校初日からいきなりか……じゃあ、うちは君にやってもらおう」
「はい」
黒板の前に移動しチョークを持って答えを書き込む。
カッカカとチョーク特有の音が鳴る中、後ろの生徒達の熱い視線が背中に集中する。
『間違えろ、イケメン』『間違えて恥を掛け』『サスケ君、ガンバ！』
ビームが放たれているのではないかと思うほどの視線を耐え抜いた俺はチョークを置いて、先生を見る。
「……正解だ。さすがだな、うちは君」
「どうも」
この調子で国語・社会・体育と高成績を叩き出した俺は……。
「サスケ君！勉強を教えて」
「サスケ君どうやったら、簡単に逆上がりができるの？」
「サスケ君、恋人はいるの？」
「サスケ君、趣味は？好きな女の子のタイプは？」

お昼休みには見事にクラスカースト上位者に君臨した。
フハハハ、幼女であるが我が世の春が来た!!
そして昼までになると大体のグループが把握できる。
「くそぉ!!キャップでお腹いっぱいなのにさらにイケメンが女子を浚って行きやがった!!」
「奴は伝説の魔眼を持つ一族。女子は奴に操られてしまったようだ……。
そのせいだろう…俺の魔眼も共鳴して疼いている。
このシュナイダー大和の宿命のライバルか?」
「ハハハ。まあ、すごいよねうちは君は頭もいいし、運動も出来る。
大和の言ってる魔眼は関係ないけど女子の人気者だね。
男の僕でもカッコイイと思うよ」
「うん、でもなんでかな?私、ちょっと大和みたいに見える」
「クーラって奴だな!!」
「キャップ…それってクールの事だよね?それだと宇宙人だよ」
隣のクラスから俺の存在を確認してきたであろう角刈りの少年とモヤシの様な少年。
中二病が絶好調の少年、バカッぽいがイケメンな少年。
そして純粋で可愛いらしいロリの鏡、岡本一子ちゃんのグループ。

そして俺のクラスの上位に位置する勝気な　杉浦　綾香ちゃんと大人しい清水　美奈子ちゃんなどなどの女子グループ。
生意気なクソガキ共チームとその他多数。
全てを把握した。
ただ…一人だけ気になる子が居る。
椎名　京ちゃんだ。
彼女は大人しいのか休み時間もずっと本を読んでいる。
食事時も誰も誘われない。
いわゆるボッチというやつだ。
彼女を見ているとなんとも言えない気持ちになる。
ＮＡＲＵＴＯのオンラインゲームに夢中になり過ぎてドブにシュートしてしまった、わが青春。
集団行動での班決めで、必ずあまり……。
学園祭で過ごした便所飯……。
オタクと罵られ、ゲームにしか生きがいを感じられなかった悲しい青春を……。
大人になり子供となった俺には彼女の気持ちがよくわかる。
ここは人生の先輩として彼女とお友達になろうではないか!!

「すまん。ちょっと椎名のところに行ってくる」
『え!?』
俺が京ちゃんの名前を口にした途端にクラスが固まった。
え？なに？
「……えっと、どうして？」
「辞めときなよ、サスケ君」
困惑する俺に辞めろと忠告する女子たち。
もしかして、彼女はヤの付く自由業の方の娘さんなのだろうか？と思った次の瞬間、彼女達の言葉を聞いてショックを受ける。
「椎名菌がうつっちゃうよ！」
「サスケ君が汚れちゃうよ！」
その言葉を聞いてビクッ一瞬だけ肩を震わす京ちゃん。
彼女の動きは、純粋な子供たちが彼女の胸に面白半分で鋭いナイフを突き刺したように見えた。
彼女たちがクラスメイト達が一瞬にしてモンスターに見える。
「お母さんがインバイの子供だから遊んじゃダメだって言っていたの！」
「サスケ君、椎名菌の代わりに私と話しましょ」

俺はストライクゾーンの広い男だ。
幼女から熟女まで幅広い変態紳士であると自覚している。
しかし、嫌いなタイプが存在する。
それは……。
「そんな事は、知らん」
他人を喜々として追いつめる悪意の塊だ。
周りにいる幼女たちを押しのけ、椎名　京ちゃんの元へと真っすぐに向かった。
彼女も俺の存在を会話の内容を聞いて、気になっていたようで彼女の視線は本から俺に移った。
クラス中の生徒が見守る中、俺は彼女に話しかけた。
「ホームルームで自己紹介したと思うが…うちはサスケだ。
お前の名は？」
「……椎名…京。」
クラス中の注目を集めて心苦しいのか、突然声を掛けられて困惑しているのか…下を向きながら自身の名前を言う彼女。
「その本、難しそうだが……面白いのか？」
「…うん」

「じゃあ、今日の帰りに本屋で教えてくれ。買って帰るから」
「……い、いいよ」
頭がいまだに混乱しているのか、ゆっくりと返事をする椎名。
彼女の持つ本のタイトルは『アリー・ベッターと失われたマイケル』。
口実で紹介をお願いしたが、面白そうなタイトルだ。
マイケルは何処にいったのだろうか？
「ほ、本なら、私が紹介するから!!」
「椎名菌!!ちょっとその本をよこしなさいよ!!」
ガン!!
かわいらしい幼女の声も耳障りな雑音に聞こえ始めた俺は近くの机チャクラで練った拳でを粉砕する。
誰の机か分からないが、どうでもよかった。
俺はこういうのが一番嫌いだ。スターダムな人生？そんなもんは幼女の為にくれてやる。
ボッチ上等だゴラァ!!中・高ボッチを貫いた童貞魔法使いを舐めんなよ!!
「お前ら…うぜぇよ」
写輪眼を使って睨みを利かす。

その姿は、小さな極道に見えるだろう。
そして、大きな破砕音と恐怖で泣き出した幼女達の声を聞きつけた我らが担任が現れた。
「おい、何事だ!?さっきの大きな音は一体なんだ!?
まさか問題を起こしたんじゃないだろうな!?」
問題を起こした？
破壊された机や泣いている幼女を見てまず言うのが問題を起こしたか？だと？
普通はケガはないか？机の木片が刺さっていないか？と幼女を心配するのではないのか？
「先生、悪いのはすべてうちはでーす」
「うちはが女を脅して机を壊しましたー」
「う、うちは君が？ほ、本当か？」
「はい」
色々と思うところがあるが、とりあえず担任には全てを把握してもらおう。
説教を受けることになるが椎名についても相談すればきっと改善されるはずだ。
罰は甘んじて受けよう。
「わかった。うちは君、帰りに話をしよう」

「はい」
その後の授業と休み時間は、当然のごとくボッチとなった。
誰も話さない。
遠巻きで男子達が陰口を言う程度だ。
陰口を培ったスルースキルで回避した俺は、生徒指導室にて内海教諭と二人になった。
「うちは君。困るよ、あんなことをしちゃー」
「すみませんでした。」
軽い調子で注意する教諭に頭を下げる俺。
「じゃあ、もうするなよ。壊れた机は処分して余っていた机をそのまま使うから」
「……それだけですか?」
軽い調子で終わった説教に違和感を感じた俺は帰ろうとする教諭を引き留める。
「ん?だって反省したんだろ?面倒だし、親にも黙っていてやるよ」
「理由は聞かないんですか?」
「そんなのはどうでもいいよ。
名門うちはの君が無事に卒業してくれればそれでいい。
だから、大人になったら何らかの形で返してくれればいいから」

おいおい、どこまで腐ってるんだ？
まさかとは思うがこの教師は……。
「貴方は椎名がクラス全体に虐められているのを知っていたのか？」
「え？ああ、あの子ね？初めて知ったよ。
なるほど…あの子の為に机を破壊したのか……」
軽い反応だが虐めは知らなかったようだ。
幼い子供が虐められているのを知って対策を……。
「じゃあ、うちは君。君の事は黙っててあげるからさ、椎名のせいにしようよ」
「は？」
「だって、そうすればうちはの世間体は守れて楽だ。
彼女は弓道場の娘だし、動機は虐めにキレたと言う事で」
腐っていやがる。
それが教育に携わる人間か？
俺の前に居るのは教師ではない。
権力と金に貪欲な腐った動物だ。
「なに、謝礼は…」
「もう喋るな」

家畜以下のクソ野郎に写輪眼による幻術を掛ける。
正義の忍。
そんなものは小雪と遊ぶ為の冗談だった。
修行も、健康と程よい筋肉をつける為に遊びでやっていた。
だけど、俺は…この時本気でなってもいいと思った。
正義の忍に……。
翌日、内海は逮捕されて小学校を解雇された。
彼の人間性を疑う内容が詰められた一個テープがＰＴＡの会長と新聞会社と警察に届けられたからだ。
『私、川神小学校に勤務する内海は少女の裸に興奮する性癖を持っており、プールの脱衣所や女子トイレに盗撮カメラを設置しおります。
そして、一週間に一度、録画した動画を自宅のＰＣで再生し、休日にレッツパーリィするのが何よりの楽しみです。
私の受け持つクラスは一人の女子生徒を虐めるクソガキの集団で、注意して相手にするのが面倒だったので放置しておりました。
具体的には出席番号１５の○○が女子生徒の物を隠したり、出席番号２１の○○が体躯倉庫の裏で石をぶつけて……。

さらには隣のクラスからもいじめを受けていたのを知っておりました。』
教諭の肉声で、録音されたテープの事実性を確認する為に教諭の自宅を捜索したところ。
女子児童の盗撮動画が見つかり、虐めの件も警察が調べて事実と判明した。
これにより俺のクラスのいじめグループの大半は、椎名に謝罪する事なく引っ越した。
残った、者たちは母親と父親にボコボコにされて顔面を腫らしながら椎名とその父親に謝罪した。
特にガクトと呼ばれていた生徒は時々暇を見つけては椎名を廊下から罵倒していたようで彼のお母さまの手によって、顔面だけアンパンマンに変身し、原型を留めていなかったのがとても印象に残る。
いじめを見ていただけの中二病の生徒も虐めていた生徒と同じように顔を腫らしていた。
引っ越した奴ら以外の両親はまともな思考をしているようで安心した。
この事件後も、クラスメイト達と話はしないがボッチではない。
一人だが大事な友達が出来た。
「サスケ。今日はどんな修行するの？」

「チャクラ…椎名の家だと気だったか？あれを使った修行を考えている」
「それはお父さんに教えてもらったから大丈夫。それよりも水面歩行を教えて」
「随分やる気だな？京」
「うん。小雪を追い抜く」
「そうか。頑張れよ」
「サスケ」
「ん？」
「大好き」
名前は椎名　京。
好きなものは読書とサスケ。
所属グループは『暁』。
ちなみに、転校した原因はいじめを行っていた子供たちが男児は全裸で、女子は日曜アニメのコスプレをして変顔をかましながらマイケルのス○ラーを駅前でダンスったのが原因らしい。
そして、男子達は悪戯好きの高校生などにネットにアップされた後、謎の人物によってうちはの兄弟のようにホモサイトに投降されたようだ。

3話

うちはの屋敷にて男と老人が密会をしていた。
「ほっほ。中々に面白い息子だの…フガク」
「ただの愚息です」
男と老人はサスケの父と武神の異名を持つ川神　鉄心だった。
サスケの父、フガクに依頼され、一人暮らしのサスケを見守っていた鉄心はサスケの所業を見て聞いていた。
褒められた手段ではないが、鉄心的にはとても痛快で誇らしい若者が一人増えたと喜んでフガクに報告をしていた。
「あの子を見ていると…師匠『うちはバサラ』を思い出す」
「御爺様をですか?」
「原爆から人々を守るために一人になったあの人とそっくりじゃ」
「そう…ですか」
長く伸びた口ひげを撫でながら、懐かしそうに語る鉄心はニヤリと笑った。
「いや……もしくはどこかのうちはの青年に似ておったかもしれぬ」

「？」

「昔、名家で集まるパーティーで虐められていた不死川家の分家筋の少女を助けて悪役となり、嫁にした青年と…の？」

「さ、さぁ。誰の事ですかな？」

「だれの事じゃろうな？その二人の間に生まれた子供が同じことをする。

時の流れとは実に面白い。

しかも、もう一人その青年を好いた少女が…居るところなんかもう……」

「……報酬にもう一冊ほど付けますので勘弁してください」

「ほっほっほ」

師匠の孫であり、自分の弟子であった男から、本来は無料であった仕事をフガクからの報酬と言う名の気持ちである、エロ本を三冊手に入れた鉄心はホクホク顔で自宅の寺へと帰っていった。

さすが元弟子。師匠の性癖は把握していた。

川神　鉄心は年老いても生涯現役である。

「それにしても暁か…ちょっとお願いしてみるかの」

☆サスケ☆

椎名父の助けを借りて、チャクラ…いや、気の使い方が忍者らしくなってきた二人。
本日も河原で修行する我ら暁が本格的に忍のグループとして動いても問題はないかもしれない。
……。
活動って何をすればいいのだろうか？
本家の暁みたいに傭兵か？
いやいや、少年兵は禁止だろ？つーか戦争に参加するのは嫌だ。
じゃあ、どこかのカエルの仙人の様に覗きを……あかん。
俺は喜々としてやりたいが、さすがに女子にやらせるのはアブノーマルすぎる。
……。
昔ジャンプで読んだ万屋みたいな感じでいいかな？
雑用とか迷いネコ探しとか…。
「サスケー!!見て見て影分身の術ぅ!!」
「私の愛も影分身」
ボンという音と共に分身を作った小雪と京。

気の概念があるといえ、お手軽に影分身の術を披露する少女たち。
うん、リアルハーレムの術だな。
大変よろしいと思います。
「ねえ、サスケ。私たちは何時活動するの？」
「修行ばっかでそろそろ飽きてきたよー」
「そうだな…とりあえず依頼を受けよう。
雑草取りでも、掃除でも、ネコ探しでも手広く引き受けて、俺たちの存在を認知してもらうんだ」
「おおー。地味だけどそれっぽい」
ついでに覗きのエロスポットでも探そう。
やる気に溢れる少女たちを眺めながら邪な考えが浮かぶ、そんな時だった。
時々感じる謎の気配の様な物が俺を襲う。
「……」
はじめはすぐに消えるし、気のせいだと思って無視を決め込んでいたのだが、ここ最近はいい加減鬱陶しく感じるようになり。
気配の主を探す為に写輪眼を駆使して周囲を見渡す。
今回は珍しく気配が消えない。

まさか犯人とご対面か？
もし、犯人がショタ好きのお姉さまだったらどうしよう？
わくわくと期待に胸をふくらましながら出てくるのを待つ。
「ほっほっほ、見事！気配を消したワシに気が付くとは、さすがうちはの天才児。
将来が楽しみじゃわい」
河原の近くの橋の柱から現れたのは胴着をきた髭の長い爺さんだった。
俺の期待を返せ、くそジジイ。
「ここ何日も俺をつけまわしておいて何を言っている」
「なに、うちはの天才であるお主にちょっと依頼を頼みたくてのう」
「何処から聞いていたかは分からないが……依頼の内容を話してからだ。内容次第では断る」
写輪眼で睨んでいる俺に、ニコニコとした表情のジジイ。
まるで俺とのやり取りを楽しんでいるようだ。
「依頼の内容は……天狗になっとるワシの孫娘と戦ってほしいのじゃ。
なに、武術の心得もあり、そこそこ強いから遠慮なく殴ってよいぞ」
「いいだろう」
孫娘と聞いて条件反射で答えてしまったが、内容も大した事はないようだ。

報酬としてこのジジイに老人会などで暁を宣伝してもらえば知名度はそれなりに上がるだろう。

ついでにストーカー被害にあった俺の心理的苦痛にあった金を請求してやる。

「報酬として、６万と周囲に俺達の宣伝をしてもらう。

ストーカーの件は６万で許してやる。

払わなかったら警察に通報してする」

「宣伝は承知した…が。金は半額にまけてくれんかの？

ワンクリックのせいで今は手持ちが……」

懐から財布を取り出して中身を確認する謎の爺さん。

…やけにあっさりしていて怪しい。

何かあるのか？

「やけにあっさりしているが……何を企んでいる？」

「いや、マジで孫をボコって欲しいだけじゃ。

昔は肩車をせがんで来て、可愛かったのじゃがのう…まあ、あれもあれで可愛いのじゃが」

孫馬鹿臭を漂わせる爺さん。

何だろう、孫娘が凄い気になると同時に、関りを持ってはいけない気がしてきた。

だが、諭吉三枚は魅力的だ。
あれが在れば十冊以上のエロ本が購入できる。
「僕もやるー。らんらんるー」
「ボッコボッコにしてやんよ。
そして勝利する私に惚れるサスケ。
完璧な計画」
シュッシュとシャドーをしながらやる気に満ちる少女たち。
…修行の成果を見るのに丁度いいかな？
京さん、最後のところはあなたが美少女もしくは美女となり、大人になった俺と程よい関係となって乳を揉ませてくれれば、大成功ですよ。
即堕して結婚までノンストップですよ。
「ほっほっほ。最近の子供は家に籠る貧弱モヤシが多いがお主たちは大変アクティブでよろしい」
「二人がドメスティックバイオレンスに目覚めない事を祈る」
二人の少女を微笑ましく感想を述べる爺さんとM属性を持たない俺の切実な願いが口から洩れた。
「さて、じゃあ川神院に行こうかの？」

「おい爺さん。何でアンタの孫娘と戦うのに川神院に行く必要がある？」
「ん？おお！そういえば言っておらんかったか」
俺の疑問にコホンと咳をし、もったいぶる感じで爺さんは自己紹介をした。
「ワシの名は川神　鉄心。
川神院の頂点にして最強と謳われていたジジイじゃよ」
「川神だと？」
川神…それは俺の実家であるうちはと並び立つ、化け物一族。
血統によって開眼する者がほぼいない弱体化したうちはと比べて弟子を多く取り、一代で日本最強の勢力を築き上げた怪物。
曰く、地震が発生したら川神のせい。
曰く、瞳術がないのにうちはと同じ力を発揮する
曰く、弟子も化け物
曰く、光線だすんだけど何なの？
まさに現代に生きる妖怪である。
うちはも川神のように積極的に弟子を取っていれば、勢力の弱体化は防げたろうに。
戦国の世に忍の祖となったご先祖様の代と曾爺さんの代ならそれなりに居たらしいが、今の当主と分家筋は頭が固いからな……。

ご先祖様の弟子は風魔と伊賀と別れたが歴史書にのる活躍をし、曾爺さんの弟子は世界に名を轟かせる川神院を築いた。
写輪眼がなくても、京達の様にチャクラを扱う能力さえ開花すれば忍術と体術は使える。
もっと弟子を取っていれば、最強の名をうちはが維持できていたはずだ。
なんて事を思ったりしたのだが、正直どうでもいい。
俺は楽しく人生をエンジョイ出来ればそれでいいのだ。
「ほっほっほ。驚いたか？驚いたか？」
「…別に」
「それ以前に興味ない。サスケが興味を持てば話は別」
「ちょうちょー」
水戸黄門的なリアクションを期待して、悪戯小僧のような表情で俺達を見る爺さんだったが、俺と分身を消した京はすぐに爺さんの期待を切り捨てた。
小雪に至っては、分身たちと蝶に夢中で話を聞いていない。
「最近の子供は反応がつまらんのぉ。
世知辛い世の中になったもんじゃ」
「そんな事よりも早く連れていけ」

……。

「ついたぞい。今、孫娘を呼んでくるのであそこの広間で待っていなさい」
爺さんの案内で辿り着いたのは川神で有名な大きなお寺。
そこには海外などの観光客と筋骨隆々な僧侶たちがあちらこちらで見られる。
むさくるしい。
これじゃあ、孫娘もムキムキなんだろうな……。
失礼な妄想をしながら三人で爺さんに指定された広場で待つ。
「皆ムキムキで強そうだねー」
「孫娘もムキムキ？」
京と小雪の感想を聞いて安心した。
どうやら失礼な妄想をしているのは俺だけではないようだ。
早く終わらせてエロ本を読もう。
すこし待っていると爺さんと孫娘だと思われる胴着を来た少女がやって来た。
小雪と同じ赤い瞳をした黒髪ショートの少女。
しかし、その瞳は獰猛で鋭く、ウサギの様な瞳の小雪とは似ても似つかない。

「お前らがジジイの連れてきた対戦相手か…なんだ、弱っちそうな子供じゃないか」
俺達を見て落胆の表情を浮かべる少女。
身長では同年代にしか見えないのだが……。
あれか？自分を上に見せたい年頃なんだな。
俺が少女の言葉をスルーしていると、後ろの二人が少女に？みついた。
「僕、弱くないよ」
「あなたも子供」
弱い発言で二人の闘志に火が灯る。
「へぇ…中々の闘気。そこらへんの僧侶といい勝負だけど……。
私には到底かなわないよ」
「!?」
二人の闘気にニヤリと邪悪な笑いを浮かべた少女は己の内に秘められた力を解放する。
コイツ…まさか俺と同じ転生詐欺の被害者か？
鍛え上げ、不良でロリコンな高校生をボコボコに出来るスーパー小学生である二人が威圧されて動けないでいる。
「対戦相手は俺だから、今すぐ威圧を辞めろ」

「へぇ。お前は動けるんだ？
　じゃあ、そこそこ楽しめそうだな」
「いい加減にせい！」
「いだぁ!?」
　にらみ合う俺達の横に居た爺さんが自分の孫の頭に拳を振り下ろす。
　確かに、目の前この少女は問題児だ。
　スーパー小学生を上回る、戦いに飢えたスーパー小学生２。
　爺さんが何とかしたいのもよく分かる。
　二人にちょっかい出したし、遠慮なく殴らせてもらおう。
「それでは立ち合いを始める！遠慮なくぶつかるがよい!!」
「お！珍しいなジジイ。いつもは有効打で終わるのに…これは本当に期待できそうだ」
「ほれ、さっさと位置に付かんか」
　広場の中心に移動した俺と少女は爺さんの指定する位置まで離れて、相対する。
「それでは東方…川神百代!!」
「おう!!」
「西方…うちはサスケ!!」
「ああ」

爺さんに名前を呼ばれ俺達の闘気が高まる。
「それでは……始め!!」
爺さんの合図に俺に向かって飛び出す少女…川神　百代。
そのスピードはロケットを彷彿とさせ、子供の物とはとても思えない。
これで転生詐欺にあった人間ではなかったら改造人間の疑いが浮上する。
「耐えて見せろよ!!川神流…正拳無双突き!!」
そしてスピードに乗った状態で放たれる拳。
しかし、残念な事に……
「遅い」
「はぁあああああ!!!」
雨の様に降り注ぐ拳をひたすらに回避する俺。
避けた拳の一撃一撃が衝撃波を作り地面が抉れる。
普通の人間に直撃したらミンチになるのではないだろうか？
「当たらない…だと!?」
「残念だったな。レベル差というやつだ」
「ぐぅ!?」
熱い拳のベーゼを完全に避け切った俺は、人生で言ってみたかったセリフを吐いて、

回し蹴りで川神百代を蹴り飛ばす。
ゲームだとレベル３０のロックリークラスだろうか？
忍術も使わないし、ワンクリック詐欺とは関係ないのかもしれない。
「美少女に蹴りを入れるか…」
「勝負に女と男を出すのか？だったら興ざめだな」
「いや、むしろ大歓迎だ!!お前は最高の対戦相手だ!!」
喜々とした表情で構えをとる川神百代
まさかのＭ属性!?
まだ小学生なのに業が深いな。
いや、ただのバトルマニアか。
「くらえ！川神流…致死蛍！」
マシンガンの様な拳から、こんどは気弾かよ!?
突き出された右手から放たれる気の塊。
さすがに避けたら周りが大変だよな……。
俺は右手にそれなりの気を集中させて、雷の性質変化を加える。
リアルで初めて使うが、ゲームで覚えた術は箸を使うように簡単に出来る!!
チチチチチ！と独自の音と共に右手からほとばしる稲妻。

俺は右手に纏った稲妻をそのままに、川神百代の放った気弾に突きを放つ

「千鳥!!」

別名雷切と言われたこの術は、川神百代の気弾を豆腐の様に切り裂きいた。

切り裂かれた気弾は形を保てなくなったのと強い気のエネルギーを受けた事で霧散して消えた。

「ハハハハ!!やるじゃないか!!だが……勝つのは私だ!!うちはサスケぇ!!!!」

「面倒な…」

自分の技が紙切れの様に破られたのに、心が折れる事なく高揚する川神　百代。

バトルマニアではない俺には分からに境地だ。

「つれない事を言うなよ!!美少女がここまでお前だけにここまで夢中になっているんだ…ぞ!!」

「拳を振るわず、そのセリフを好きなやつに言えばモテると思うが?」

放たれた拳をバシン!と音を鳴らしながら、左手の平で包み込むようにして受け止める。

「は?お前以外の男なんて男として見れないから無理だな。エロ本に夢中なサルかチンパンジーにしか見えない」

とても口には出来ないが、俺もそのチンパンジーなんです。

男なんてそんなもんなんですよ、もっと許容してくれませんかね？
「まあ、そんな事はどうでもいい!!話に夢中にならず、振り払うか、カウンターではじくべきだったな!!
この距離なら対処できないだろう!!川神流…」
「対処できないのはお前もだろう。
これで終わりだ……」
話している間に作った乱回転する気の玉を川神百代の腹部に押し当てる。
「螺旋丸!!」
「おおぉぉぉおおおおお!!??」
そこそこ手加減された螺旋丸を受けた川神百代は、そのまま後方に吹き飛び庭園の木々をなぎ倒しながら寺を囲う石壁に激突。
そのまま、気を失ったのかピクリと動かずにバタリと地面に倒れ込む。
こ、殺してないよね？さすがにこの年で殺人は勘弁してもらいたいのだが……。
慌てて、川神百代に近づく俺。
そんな俺の心配をよそに川神百代は……。
「いたた……体中がいたいぞ」
むくりと起き上がり、まるで運動会で張り切った後、筋肉痛になったおじさんのよう

な反応を見せた。
は？手加減したとはいえ、螺旋丸だぞ？
なんだろう。生きてて安心したが、その反応はちょっとショックだ。
「勝者！うちはサスケ！」
爺さんの判定により、俺の勝利が確定した。
「なぁ、動けないからおんぶしてくれよ」
「…爺さんに頼め」
「おいおい、美少女が頼んでるんだからここは喜んで担ぐ所だぞ」
「もっといい女になってから出直してこい」
軽口を叩き合いながらも肩を貸すことにした俺は、川神百代を連れて爺さんの元まで歩き出した。
そして、爺さんのところに辿り着き、川神百代を渡す。
「ほっほっほ。手加減された上に負けるとは百代もまだまだじゃのう」
「…次は手加減させない。そして必ず勝つ！」
「知ってるー。これって負け犬の遠吠えっていうんだよー」
「あれだけ自信満々だったのにね。私なら恥ずかしくて引きこもるレベル」
「よし……回復したらサスケの前にお前らと勝負な」

「「きゃー、助けてサスケー」」
爺さんに背負われた川神百代を挑発しまくる爺さんと小雪と京。
そして、それに楽しそうに怒る川神百代。
彼女には出会った時の棘は完全に抜けた印象を受ける。
こうして暁の初めての依頼は完了した。

……。

「サスケー。戦いっましょーー!!」
「教室まで来るんじゃねぇよ、ウスラバカ」

ただ、後日になるとストーカーが爺さんから、バトルマニアの少女に変わったのは言うまでもなかった。

4話

「サスケぇ…勝負しようよー。美少女がこんだけ頼んでるんだぞー。」
寄生虫の様に張り付かれる事になれてしまった俺は、小4もなった今も百代を背中に装備していた。
「うちはの奴は猛獣使いのクラスを手に入れたようだ。
俺も、魔獣を探さねばならないか?」
「椎名のヤツよく、あんな奴といられるよな……俺様ちょっと見直したぜ」
「いやー、あれは肝が据わっているというよりもうちは君に惚れているだけだと思うよ?」
「それよりも今度カラオケ大会があってよー」
「キャップはブレないわねー」
ヘルプを求めようにも京はトイレ。
居るのはカラオケのメンバーを探す風間ファミリーとその他の生徒たち。
ボッチの俺を助ける者は誰も居ない。
「この間、戦ったばかりだろ……断る」

「いやー、この間も楽しかったよなぁー。影分身の術だっけ？あれ、教えてくれよ」
俺の文句など気にする事無く、術を教えろと言ってくる。
チートの天才様に教えても面白くないんだよ!!
おしえるなら落ちこぼれがいいんだよ!!
自来也に憧れるんだよ!!
「断る。京たちにでも頼め」
「いいじゃんかー。暁にも入ったんだし、お前が教えてくれよぉ。
あれを覚えれば学校サボりまくりの夢の生活が待ってるんだからさぁ」
「そんなことをしたら、教えた俺がお前の爺さんに襲われる」
「お前ならジジイに勝てるから大丈夫だ。
なー依頼も少ないし、刺激が欲しんだよー」
爺さんのお陰で俺達暁は万事屋みたいに依頼をこなしては、報酬をもらっている。
迷子の猫を探してほしい。
迷子の犬を探してほしい。
庭の雑草を処理してほしい。
いじめっ子から助けてほしい。
最近だとコンビニで集会みたいな事をしている暴走族を懲らしめて欲しいなどとレ

ベルの高い依頼が舞い込んでくることもある。
それを知った百代は暁の活動に興味を持ち始めた様で、一週間前に見事俺達のグループ入りを果たしたのだが……。
「…じゃあ借金を返せ。
話はそれからだ」
「ZZZ」
依頼料を手にした百代はハマっていた野球カードに投資。
さらに、食べたいお菓子に漫画と使いまくった。
そして、そんな生活を送っていればすぐにお金は尽きる。
故にコイツは、俺と京に借金をする。
ちなみに小雪は、再婚したお母さんにお土産を買ったり、自分の好きなマシュマロを買い占めているので持ち金は少ないので借りることはないのだ。
つまり、こいつの金のサイクルはこんな感じになっている。
報酬→カード・漫画・菓子→借金→報酬で返す→漫画・カード・菓子→借金
パチンコにハマり家庭を崩壊させる駄目親父のような悪循環に陥っている。
正直、おれはこいつの将来に大きな不安を抱いている。
だから、早くこいつに良い旦那さんのところに嫁ぐか、性格が丸くなることを切に願

わずにはいられない。
「刺激のある依頼があるか爺さんに聞いてやるから、教室に帰れ」
「へーへー」
背中に戦えお化けがくっついて来るも平凡な日々を過ごしていた俺達だった。
それと、これは完全に余談であるが。
京が虐められる原因を作った椎名母と浮気相手のチャラ男は椎名父が起こした離婚裁判で精神的苦痛の入った多額の慰謝料を払うことになった。
目撃情報によると浮気を知っても奥さんとの関係を何とかしようと頑張っていた椎名父であったが、ある日京と一緒に家に来たという黒髪の美少年と話をした所。
何故か、椎名父の考えが変わり、離婚届をどこからか調達して来た娘と共に椎名母と離婚。
不貞を働いた事に関する慰謝料を父と子で強く請求した。
しかし……。
「ふざけないで！つまらない貴方が悪いんでしょ!!」
と、慰謝料の支払いを拒否。
そして、浮気相手のチャラ男も……。
「払うわけねーだろ。旦那であるアンタが毎日ヤラないから悪いんだろ？」

このような感じで支払いを拒否。
支払いを拒否された場合のプランを考えていた娘は裁判を起こすことを父に提案した。
頼る専門の弁護士から裁判費用まで詳細に語る娘は、まるで誰かと相談し、どこまで慰謝料を搾り取るかを考える詐欺師のようだった。
母親とはいえ、虐められる原因を作った娘の恨みはとても深い。
それから程なくして、裁判が始まった。
椎名父と娘の精神的苦痛を含めた慰謝料は高額だ。
チャラ男は社会を舐めた若者らしく、裁判を舐め腐っており、最後まで欠席した。
最後まで欠席したチャラ男に強制執行事件として家財と全ての財産を差し押さえられる事が決定した。
そこでチャラ男はようやく事態の深刻さを理解したらしく、銀行からすべての現金を引き落とし逃亡を図るも、謎の人物が裁判所に細かく通報した事により一時身柄を拘束。
強制執行が行われ、彼は慰謝料を払いきれず見事に破産した。
今は新しい住所である橋の下で、手作り感溢れる段ボールで出来たマイホームで日々を過ごしているらしい。

チャラ男の末路を知った椎名母は、旦那が悪い、私は悪くない、と言う主張からチャラ男に脅されていた。
私は今でも椎名父を愛していると、言い始めた。
これには平等で有名な裁判長も呆れていた。
そんな椎名母に呆れる空気の中、弁護士が提出した匿名希望の人から送られたと言う一本のテープとチャラ男と椎名母がイチャつく大量の写真。
椎名父が裁判長の許可を取ってラジカセで再生する。
『貴方との浮気について、クソ旦那が裁判を起こしたわ』
『ああ…マジでめんどくせぇ』
『でも大丈夫。あの旦那は私に未練たらたらだったのよ?愛している。ごめんなさいとか適当に言えば裁判をやめるわ』
『さすが、マコちゃん愛してるー!』
『私も愛してるわ。テッちゃん』
そこから始まる子供には聞かせられない、とてもながーいラブシーン。
卑猥な単語にはピー音が入っているがとても生々しい物だった。
証拠が決めてとなり、裁判は終了。
椎名父と娘は見事に大勝利した。

判決が下った後、双方の弁護士と裁判長が鼻血を流しながら前かがみになっていたのが印象的だった。

こうして椎名母もチャラ男と同様に破産。

実家に帰ったらしいが、離婚の詳細を知らされた両親に勘当されて、キャバクラで働き一人暮らしをしている。

ちなみに音声テープは人妻のビッチ臭が謎の人物の趣味ではなかったので、海外サイトを経由してエロサイトに投稿された後に破棄された。

そして音声テープはエロサイトのランキング一位を飾り、二人の若者に奇跡を起こした。

絵は上手いが、シナリオが下手なニートとシナリオは凄いが、絵が下手くそのニートがタッグを組んだ時。

この音声データを聞いた時のインスピレーションと激しいリビドーにより、生まれた作品『真剣でみだらな人妻さん』が大人に大ヒット。

成年誌界に旋風を巻き起こし、数年後にはアニメ・エロゲと手広く活躍し、将来はエロの巨匠と呼ばれ、生きる伝説となった。

☆☆☆

「それにしても、京の父親と小雪の母親が知り合って数日で再婚ってすごいよな。
サスケ…お前、なんかやったか?」
「いや…俺はただ、二人を紹介しただけで何もしていない」
学校から三人で川神院に向かう道中、百代が椎名父と小雪母の再婚についての疑問を口に出し、それに正直に答える俺
そう、丁度一月前に俺は裁判で勝利したものの、どこか寂しい雰囲気を漂わせる椎名父に小雪母を紹介したのだが、驚くべき事に二人はたった数日で再婚したのである。
そのまま、籍を入れ一週間前には親族だけの結婚式が行われた。
二人の間に何があったんだろうか?
「ん～～なんか、外でお酒を飲んでいるうちに意気投合したみたいだよ」
「小雪の言う通り。お父さんが小雪のお母さんと外で飲んで、朝に帰って来たと思ったら。
『京、この人が新しいお母さんだ』って紹介された」
「僕もだよ。一体何があったんだろうね」
二人の言葉で察した俺は、話題を変更させることにした。

この話はまだ、少女たちには早すぎる。
もうちょっと色々と育ってからにじっくりとする事にしよう。
「それよりも、依頼だが……暴れる事が出来る物がなかったらどうする？
ネコ探しか？」
「私はネコ探しには飽きたな。パックンが有能過ぎて、すぐに終わってしまう」
「僕はいいと思うよ？終わった後にパックンを抱っこしたい」
「私はサスケを抱っこしたい。むしろ抱っこされたい」
「許せ京。大きくなったらな」
「……無念」
見事に話題を変更出来た俺は、京のおねだりを額を小突いて、イタチプレイしながら断腸の思いで断る。
ロリは守り、愛でる者！色々な部分が大きくなって俺の事が好きなら幾らでもしてあげるよ!!
「おー。姉が振られてしまった。
代わりに僕が抱っこしてあげよう」
そういって、振られた京に抱き着く椎名小雪。
彼女は7月生まれで、4月生まれである京の妹となったようだ。

ついでに俺もお兄ちゃんと呼んでくれないか？
そんなこんなで道中仲良くしながら、目的地へと辿り着いた俺達は門に設置されている態々鉄で作って頂いた依頼箱と書かれたミニポスト。
ポストの側面の鍵穴にカギを差し込んで中身を見る。
この中にご近所さん達の依頼内容と報酬が書かれた依頼書が入っている。
始めた頃は悪戯もあったが、住所と電話番号の記入欄を増やして受ける際は事前に連絡をすることにしたので嘘の依頼や悪戯は無くなったので安心して依頼を完遂している。
ちなみに、依頼中に依頼内容に嘘があったと発覚した場合は即座に依頼を中断。
報酬金額の倍である違約金を百代の物理攻撃による請求が待っている。
あと、子供が働いたら不味いと思っている諸君は安心してほしい。
報酬は子供のお小遣いレベルの金額とお菓子だ。
しかも、川神院のトップが認めている…故に何も問題はないのだ。
「そこそこ入っているな。
何々……駄菓子屋の店番をしてほしい。
サスケちゃんにマッサージをしてほしい。
庭の掃除をしてほしい。

サスケに宿題を手伝ってほしい
参加人数が少ないので一週間後に商店街で開催されるカラオケ大会に出てほしい
……か」
「駄菓子屋とマッサージと庭掃除はいつもの人たちだから、サスケの影分身で十分だな」
「…宿題の依頼主が小雪になっている」
依頼書を取り出し、みんなに見えるようにして読み上げるが一枚だけ公私混同している依頼書があった。
えへへと笑う小雪はかわいらしいが、本人の為にならないので当然……。
「この依頼は却下だな」
「えー」
小雪の抗議の声をスルーして、依頼書を近くのごみ箱に捨てた。
「分からないところは、お姉ちゃんが教えてあげるから我慢しなさい。」
「わーい」
不満顔の小雪を甘やかす京。
お姉さんぶりたい年頃なのだろう。
とても微笑ましく思います。
「いいなー私も妹か弟が欲しいなー。

父さん達が修行から帰ってきたらお願いするかな」
二人の姉妹関係が良好なのが羨ましかったようで、一人っ子の百代は父と母に家に帰ってきたら兄弟を所望する事を決めたようだ。
「そんな事よりも、最後の依頼だがどうする？カラオケ大会の出場願いだが？」
「私は賛成。サスケへの愛を歌いきる」
「僕もいいよー」
「…まあ、たまにはいいか。
こき使ってくる兄弟子達への不満を歌って解消する」
満場一致で本日すべての依頼を引き受ける事にした俺達は、電話で依頼者の本人確認を済ませ、簡単な依頼には影分身を向かわせた。
しかし、カラオケ大会に出場する形式が俺達の想像していたものとは違った。
なんと、依頼者は俺達四人のグループでの出場ではなく一人一人の個人での出場を希望していたのだ。
「相談して決めると保留にしたがどうする？」
「別にいいよー」
「私もいい」
「私も不満の捌け口になれば別にいいぞ」

と、言うわけで、俺達暁はカラオケ大会で個人出場することになった。
それから一週間はポストに臨時休業の張り紙を張り、それぞれが歌とパフォーマンスの練習でカラオケ屋に通い詰める事となった。
パフォーマンスで忍術が使えない百代は俺の影分身をレンタルして出場する事になった。
大丈夫かな……俺の影分身。
正直ストレス発散の為に使われていないか心配である。

☆一週間後☆

川神の師範代ルーが司会を務めるカラオケ大会が商店街にて開催された。
『では！エントリーナンバー1!!小雪軍団だッ!!
歌うのは夢想○!!』
『おー』
カラオケ大会の為に作られた特別ステージに上る影分身とオリジナルで構成された小雪軍団。
彼女たちの子供らしい体全体を使った動きと子供らしい歌声で会場は和やかな空気

に包まれ、数人の大人たちはロリに目覚めた。
『素晴らしい歌声だーー!!会場の客も審査員も顔が綻んでいるぞーーーー!!』
「バッキャロー。かわいらしい歌声だったぜ!演出と合わせて８０点だ」
『おおっと!いきなりの高得点!!これを抜ける者は現れるのかぁーー!?』
分身を消してステージを降りてきた小雪は、８０点の高得点をたたき出した。
さすがロリ。
会場のおっさんたちをメロメロにしてしまったようだ。
『続きまして!!ナンバー2!アイ・ラブ・サスケ!!
歌うのは最強の○○計画!!どんな歌声を披露するのかァーーーー!!』
司会の紹介でステージに上がったのは京と影分身の二人。
聞いたことがない曲だが一体どんな歌とパフォーマンスを披露するのだろうか?
「変化」
『おおぉーーっと!ここで少女の一人が少年に化けたーー!?』
京が変化したところで冒頭のイントロが流れ始める。
『今宵…私は…サスケと……添い遂げ～たいのです～～♪』
『へ?』
小雪の残したほんわかした空気が一瞬で霧散した。

曲が始まってから歌う京の後ろで曲に合わせて手を繋いだり抱き合ったりとあらゆるシュチュエーションでイチャつく京の分身たち。
テンションの高かった司会も完全停止している。
やべぇよ、なんだよこれ……一体どんな羞恥プレイだよ!!
心の中で悶絶していると曲も終盤に差し掛かった。
早く!!早く終わってくれ!!
『サスーケだーけーにー…さーさーげーまーすーーー……。
み・や・こ・と・サスッケ!!』
『ハイ!』
辞めろ!止めてくれ!!俺をそんな目で見ないでくれ!!
周りの同情する視線が俺の心の傷を抉った。
見事に歌いきった京のバックに居た分身たちはタイタニックのポーズを決めて終了した。
『え～…。サスケへの愛情がすっごく詰まった表現が…何とも言えない!!』
それはそうだろうよ。
愛が重くて何も言えないよ。
「ま、まぁ。愛することはいいことだが……６０点。

歌は上手いのにもったいないぜバッキャロー」
『さ、さぁ！続きましてはエントリーナンバー3!!ピーチファイターズ!!
歌うのは、アイアムショック!!』
「ピーチファイターズ!!押してまいる!!」
『おおーっと!!百代と共に現れたのは肩パットを付けた謎のスキンヘッドとモヒカンの集団だぁぁぁぁぁ!!
一体どこで知り合ったんだぁー百代!!?』
百代と登場した筋肉ムキムキの強面の男達。
恐らく俺が貸した分身たちだろう。
どうやら百代の奴は北都の拳ＯＰであるアイアムショックを最大に活かす作戦の様だ。
『アイアムショーック!!』
『ひでぶっ!?』
『殴った――――!?ショックと歌うたびにモヒカンたちが殴られて消滅していくぅぅぅぅ!!?』
曲と同時に百代とモヒカン軍団の戦闘が始まりＯＰで主人公が雑魚を倒すシーンの再現の様だが…これはひどい。

最後まで歌いきり、分身たちを全滅させた百代だったが……うん。
ただ、戦闘を楽しんだだけだった。
『お前はもう…死んでいる』
『審査員の本屋の店長さんに聞いたところ!アニメのＯＰを見事に再現したようです!!
ただ、ここはカラオケ大会の会場なので!!暴力的な表現は今後は禁止とさせてもらいます!!』
それはそうだろう。
歌声を聞きに来たのに少女がモヒカンたちを殴るシーンを見なくてはならない。
「迫力ある戦闘シーンだったぜバッキャロー!ただ、肝心の歌がパフォーマンスに夢中でイマイチだ。
５０点!!」
今大会の最低記録を出したのにも関わらず、百代はスッキリとした表情でステージを去っていった。
ああ……もう満足なんですね?
ってそろそろ俺の番だな。
影分身を出してステージの裏でスタンバイする。
『さあ!続いてはエントリーナンバー４!鷹!!

選曲はＲ★Ｏ★Ｃ★○★Ｓ!!おおぉーっと!!何もないステージから突然現れたぞぉ!!

これは中々に面白い演出だぁああ!!』

司会の紹介と共に飛雷身の術でステージ中央にポーズを決めて現れた俺に沸く会場。

掴みは上々のようだ。

『…いくぞ』

『アラーー!?すごいキレッキレのダンスだぁあああああ!!

この動き…だだ者ではないぞぉおおおお!!』

曲が始まると同時にダンスをする俺と影分身たち。

そして、俺と影分身たちの動きの完成度に驚く客たち。

それはそうだろう。

この動きはダンスの世界において優秀と言われる人々をトレースして組み合わせた物。

そんじゃそこらのアマチュアには負けはしない。

優勝商品である商品券は俺の物だ!!

曲も終わりポーズを決めたところで会場は拍手喝采で大盛り上がり。

本屋の親父も……。

「中々にロックだったぜバッキャロー。９０点だ」
『本大会の最高記録だぁあああああ!!!』
その後は風間ファミリーが登場し、甲冑姿と見事な演出により俺と同じ９０点をたたき出した。
今大会の最高得点を持つ俺と風間ファミリー。
もし、俺達以上の得点が出なかった場合は商品券を折半か観客投票になるのだが…。
「折半で」
「いや、観客投票だろ？」
「どうみてもサスケの勝ち。会場を見たら一目でわかる」
「僕もサスケの勝ちだと思うよ」
百代と直江がお互いの意見を譲らず、話が平行線となっていた。
個人的に物欲の少ないおれは半分でも構わないのだ。
寧ろ岡本一子ちゃんの雄姿を見れたので満足です、はい。
そう思って折半に同意しようとしたのだが、百代と京・小雪が乱入して現在に至る
これは熱くなっているな…。
ここは冷静な俺が紳士的に止めてやるか……。
『さあ！ラストナンバーはこの人!!ＡＫＤ４８!!

選曲は真剣で私に恋しなさい！』
一人の女性にざわつく会場。
そして俺達は見た。
世界に通用するであろう本物のダンス。
そして切なくなる歌声。
そして…何よりも俺達に衝撃を与えたのは……。
「ああ…Ａ・秋元（あきもと）Ｋ・香苗（かなえ）Ｄ・独身４８歳か……」
「また、見合いに失敗したんだろ？未来で出会うかもしれない男に印象を与える為に大会に出るなんて…切なすぎるぜ」
「完全に失敗だろ…なんで有名なアイドルグループの制服を着ているんだ？」
「だから結婚できないんだろ」
「あのダンスと歌……友人たちの結婚式で身に着けたらしいわ」
観客たちの悲しい声を聴き、俺達は醜い争いをやめた。
俺達の争いなんて……ステージで孤独に歌う彼女と比べたら…なんて小さいんだ。
「もし、仮に彼女が低い点数だったら…折半でいいな。」
おれの提案に全員が頷いた。
そして彼女は見事に１００点をたたき出して優勝した。

彼女の事をよく知る本屋の店長は涙を流していた。
商品券なんて要らない。
どうか彼女に出会いを与えてください。
司会と審査員…そして、会場の人々心は彼女の決死の挑戦によって、一つとなった。
これを機に少しだが風間ファミリーとは話すようになった。
京は一子ちゃんと風間以外をガン無視しているが……。
虐めの恨みは深いようだ。
そして、この大会の後。
本屋に客として現れた謎の人物が本屋の店長に店員として彼女を紹介。
真面目で頑固な店長と真面目だが空回りする彼女。
空回りする彼女のフォローをするうちにほっとけなくなったらしく、店長は彼女とゴールイン。
おじさんとおばさんのカップルだが、そんじょそこらの若者カップルではかなわない本物の絆が二人にはあった。
心配になってちょくちょく二人の様子を見ていた謎の人物は、結婚を承諾して店長を抱きしめる女性と不器用で照れながらも抱き返そうかどうしようか迷う店長を見守り、仮面の下で涙を流した。

恋のキューピット仮面≪マダラ≫は恋する独身アラフォー・アラフィフ女子の伝説となった。

5話

風間ファミリーとそこそこ交友をもった頃。
小学校は遊び場である原っぱを巡った争奪戦が繰り広げられていた。
川神には武家の家系が多いせいだろう、原っぱで殴る蹴るなどのケンカをして日々小学生が奪い合う。
広い遊び場を独占したい小学生にとっては戦国時代の合戦のように重要だ。
それ故に……。
「頼むよ、うちは!!俺達の助っ人に来てくれよ!!」
目の前の彼の様に、わざわざ俺のクラスにやってきて助っ人を依頼する奴が後を絶たない。
俺の運動能力と百代を凌駕する戦闘能力をこの小学校で知らない奴はいない。
クラスで大きな声を出して勧誘するのはライバル達へ牽制と勝利宣言の為。
俺が、承諾すれば原っぱは俺が加勢したグループの領土。
たとえ俺が断ったとしても、断られた後に俺と仲良く会話をすれば、少しでもうちはが加勢するかもしれないというプレッシャーをライバル達に与えられることが出来る。

と彼らは考えているようだ。
正直、小学生が考える事じゃねぇと思う。
そして、当然であるが原っぱに興味のない俺は……。
「断る」
「あ～～、今日もダメか……。
猫を殺した事で箔を付けた六年生グループが狙っているし…諦めるしかないか……」
俺の机の前で項垂れる彼は一組のクラスカースト上位に居るトニー。
自称、風間ファミリーを倒す男は粘ることなく帰っていった。
さすがに4回も断られたんだ、もう来ることもないだろう。
俺は、楽しみにしていたアリー・ベッターの新シリーズ『アリー・ベッターと動かなくなったマイケル』を取り出して読書に励むのであった。
マイケルはどうなるのだろうか？
……。
全ての授業が終了し、新しく担任の先生になった神原（かんばら）教諭の帰りのホームルームが終わった俺と京は他クラスに居る小雪と学年が一つ上の百代と合流した。
「サスケぇ～なんか大和の奴が面白い物を見せるから原っぱに来てほしいってさ」
「…あっ、そういえば僕も大和に言われてたー」

合流し、学校の昇降口で上履きを靴と履き替えていると珍しく戦いや依頼以外で百代が話題を振って来た。
「サスケが行くなら行くけど、争いの絶えない原因となっている場所には行かないほうがいいと思う。
利用されるだけだよ」
「だよな…明らかに利用する気満々だよな……」
純粋な小雪は漫画の類を想像をしているようだが、現実をよく知る俺と京は軍師と呼ばれる少年の考えをなんとなく察した。
恐らく俺達を呼ぶことで俺達暁は風間ファミリーの助太刀として参加すると言う情報の拡散。
もしくは、情報の密度を上げる為にケンカに巻き込むつもりかもしれない。
「なぁ～行こ～う。野球のキラカードも貰っちゃったし、アイツを舎弟にしちゃったんだよ～。
お前らを呼ばないと引っ込みがつかないんだよ～～」
「今ならマシュマロが一人に付き、一袋もらえるんだー」
「物に釣られるなよ。そして、どうして直江が百代の舎弟になるんだ？」
間違いない…直江のヤツは原っぱに命を懸けてやがる。

百代の舎弟なんて、ゴリラの玩具になるような物だ。
根拠はある。
俺達が川神院に遊びに行った時の事だ。
百代の部屋に行った時、おもちゃ箱の中に唯一女の子らしい着せ替え人形があったのだ。
その人形は鉄心の爺さんが幼い百代の誕生日にプレゼントしたバビーという人気の人形。
俺もテレビCMで見ていたのでよく知っている。
購入当時は誰もがよく知る綺麗でかわいい人形だったのだろう。
しかし、現在の姿は見るも無残な姿へと変貌していた。
ロングの金髪ストレートの髪があった頭部は…スキンヘッドになり、殺の文字がマジックで汚く記入されている。
外人女性特有の青い瞳は赤く塗られて片方はマジックで書いた眼帯をしている。
頬には人斬り主人公のような十字傷。
片方の細い腕は無残にもへし折られて、あらぬ方向を向いている。
そして、この人形の持ち味である自由な着せ替えとポージングだが……。
服装はGIショーンの軍服を着ており、何故か筋肉バスターを決められた怪人のよう

なポーズを決めていた。
ちなみに服を取られたＧＩショーンは可愛らしい花柄のワンピースを着て筋肉バスターのポージングをしていた。
爺さんが見たら人形たちの哀れな姿に涙を流すだろう。
「おかしい……私は何ももらっていない。
モモ先輩とモモ先輩のクラスメイトにどうやったらサスケを落とせるか相談していただけなのに」
「ああ、きせいじじつだったか？それをどうするかだったよな？
睡眠薬を入れるとか、ジュースに酒を混ぜるとか…色々話したよな」
小学生がしていい話じゃない!!
この子時々怖いよ!!思ってくれているのは嬉しいけど、これは愛が重すぎるよ!!
そりゃあ、巻き込まれないように直江も逃げ出すよ!!
あの中二でませた直江の事だ、純粋な小雪と違って具体的な想像をしたに違いない。
つーか、百代のクラスメイトだけど友達出来たんだな。
俺は嬉しいよ……正直、既成事実について話し合っていなければお祝いの一つくらい送ったよ。
まあ、利用されるのは気分がよくないが、これで原っぱが風間ファミリーの物になっ

て、助っ人の依頼がが来なくなれば俺としてはいいか。
「わかった、いく事にしよう。
ただし俺は、マタタビに用があるから先に行っててくれ」
「了解」
「待ったねー」
「確か喋る動物を召喚して雑用をさせるんだよな……いいなぁ。
そうすれば舎弟が一杯で宿題からお使いまで２４時間無休で全部パシらせるのに……」
京、小雪、百代は俺よりも先に原っぱに向かう事となった。
そして、まるでブラック企業のような不穏な独り言を喋る百代には絶対に口寄せは教えないと誓った。

☆☆☆

変態橋と呼ばれる橋の下に来た俺は右手の親指を手持ちのカッターで薄く切った後、印を結んで地面につける。
「口寄せの術！」

術を発動させると右手を中心に文字で構成されたサークルが地面に出現し、一匹の三毛猫が煙と共に現れた。
三毛猫は忍装束を身にまとい額には忍びの文字が刻まれた額あてをしている。
彼が忍猫マタタビである。
「おお！待っておったござるよサスケ殿!!」
「で？今日呼び出して欲しい理由はなんだったんだ？
わざわざ、場所まで指定して……」
「今日はこの間の任務で知り合った、ニャンミちゃんとデートなのでござるよ!!」
デート…だと!?
目の前のクソ猫の発言にショックを覚え、二歩ほど後退する俺。
俺ですら…俺ですらまだデートした事ないのに……。
ま、まぁ。お相手は猫だし？
猫の方が早く歳を取るし？
俺は遅くはないはずだ。↑精神年齢＝彼女なし
「ニャンミちゃんは髭がとってもキュートで体も心も真っ白な乙女なのでござる。
雄猫達を退け、何度も何度もアタックしてようやく…ようやく、デートしてもらえるようになったのでござる」

心を落ち着かせた俺はマタタビから気になるあの子の詳細を教えてもらった。
どうやら相手は白猫でとてもかわいいようだ。
正直、ネコの美的感覚だからお相手が白い猫という事しかわからない。
髭がキュートってなんだ？
それにしてもマタタビのヤツ…いい笑顔しやがって……末永く爆発しろ。
「何ならサスケ殿にも紹介してもいいでござるよ？」
「いや、俺は遠慮しておく。時間までたっぷりデートすればいい」
「おお！気を使って頂いて申し訳ない!!今度、呼ばれた時は仕事を今まで以上に頑張るでござるよ!!」
「ああ、期待している」
黒い猫とすれ違うように幸せそうなマタタビと別れ、原っぱに向かう俺であったが……。
「ニャンだとぉおおおおおおお!!??」
「ん？」
マタタビの絶叫で背後に振り返ると先ほどすれ違った黒猫がマタタビと向かい合っていた。
なんだろうか？ニャンミちゃんにすっぽかされたのか？

「さ、サスケ殿ぉおおおおおお!!!」
「な、なんだ?」
涙と鼻水で顔面を濡らし、俺の足に縋りつくマタタビ。
一体何があったのだろうか?どうやらすっぽかされたなんてやわなもんじゃないようだ。
浮気でもされたのか?浮気されたなら慰めるから離れてくれませんかね?
俺のズボンにマタタビの毛がついているんだが……。
「ニャンミちゃんが……ニャンミちゃんが……」
ぐずりながらも何とか説明をしようとするマタタビ。
まさか、浮気以上の展開になっているのだろうか?
浮気相手と子供でもできてしまったのだろうか?
まぁ、なってしまったものはしょうがない受け止めるのは重くてつらいだろうが、マタタビのような真面目な猫はすぐに新しい恋人を見つけられるさ。
そうだ、俺も相手探しを手伝ってやろう。
こいつにはネコ探し時にパックンと二匹で手伝って貰った事もある。
俺に出来る事ならなんだってしてやろう。
今のマタタビには慰めと癒しが必要なはずだ。

マタタビが大好きな鰹節とマタタビ酒でも買ってやるかな。
酒を飲み、鰹節でも食べて。
もっといい雌猫がいるさ、元気出せよと言って…
「ニャンミちゃんが殺されちまったぁあああああああああ!!!」
言えるかぁあああああああああああ!!!
マタタビの言葉に絶句してしまう。
まさか殺されたとは……。
これは重いよ、重すぎだよ!!鰹節でも元気でないよ!!
泣きじゃくるマタタビの背中を黙って摩る。
今のマタタビにはどんな慰めも無駄と悟ったのだ。
先ほどまで幸せそうだったマタタビ。
彼は大事な人を何の前触れもなく突然に奪われた。
彼の悲しみと絶望を俺は…自分にもいつか起こるのではないかと怖くなった。

……。

「犯人は子供の集団のようでござる」

さすがは忍猫と言うべきか、マタタビは五分ほどで泣き止み、猫助と呼ばれる黒猫から情報を教えてもらったようだ。
事件の詳細を聞いて、時々悔しそうに涙を流していたのは見なかった事にしよう。
猫助から聞いた話を要約すると人間の子供がニャンミちゃんを針のような物で笑いながら刺し殺したらしい。
中々に趣味趣向が歪んだ子供達のようだ。
子供の起こす凶悪事件の前兆として、動物を殺す行為を重ねる行動があったのをニュースでよく覚えている。
彼らは対人関係や何らかのストレスを解消する為に行っていたり、自分の強さを証明する遊びのような感覚でやるかが大半だ。
これは色々と動く必要があるようだ。
「木遁影分身の術」
これの背中から現れる五人の影分身。
木遁影分身は分身シリーズの最高峰。
須佐能乎を発動させる事も出来て常に情報を本体と共有できる高等忍術だ。
「とりあえず情報を収集するぞ」
「うう、サスケ殿かたじけない……」

飛雷身のマーキングを付けた分身たちは散開し、猫を殺した小学生を探す為に辺りの捜索に出て、オリジナルである俺も肩にマタタビを乗せ、情報集めの為に駆けだした。

……。

「なんか混乱して来たな……」

「情報が沢山あり過ぎて絞り込めないでござる」

猫と人間の両方から犯人を捜す為に情報を集めているが、全員聞いただけらしいので確実性はないし、証言は様々だ。

グループで行動しているせいか、角刈りの子供だったり太った子供だったり痩せて眼鏡を掛けた子供だったりと情報に統一性ない。

唯一全員に一致している情報は小学校の高学年という事だけだ。

小学校の高学年か……。

つまり、五年生から六年生辺りだろう。

……ん？

なんだろう？もの凄く引っかかる……。

今日、六年生について何か聞いたような……。

『あ～～、今日もダメか……。

猫を殺した事で箔を付けた六年生グループが狙っているし…諦めるしかないか……』

そうだ!!思い出したぞ!!
トニーが言ってた六年生だ!!
『オリジナル、こちら分身A。今情報に強い直江大和に話を聞こうと原っぱに潜入中。
猫を殺したと自慢する六年生が一子ちゃんのほっぺにコンパスの針をチクチクしながら耳にピアス穴を開けると脅している模様。
原っぱに来る途中に捕まった模様。
風間ファミリーおよび百代、京、小雪は動けないようだ。
正直、あの小僧を殴りたくてたまらない』
なんだと?
あの、純真無垢なロリを人質にしただと?
小雪と並ぶ俺の癒しを怖がらせているだと?
よろしい、キツイお仕置きを実行してヤロウ。
「マタタビ。犯人らしき子供を発見したから飛雷身で飛ぶぞ!!」
「おう!」

☆☆☆

飛雷身で飛んだ俺とマタタビ。
俺達の前には、分身と共有した情報通りの光景が広がっていた。
一子ちゃんはコンパスを押し当てられ、恐怖で泣いていた。
「わーん、助けてー!!」
交友を持ってからだろうか?あの子は自分の娘の様に感じる事がある。
泣き虫だけど、明るくて優しいおばあちゃん思いのいい子だ。
島津や直江、風間はケンカをしているが、あの子は違う。
何故、あの子が泣かねばならない?何故、傷つかなればならない?
俺の頭がマグマのように熱くなったのを感じた瞬間。
俺は瞬身の術で小僧の隣に移動して、コンパスを持った腕をへし折っていた。
「あぁぁぁぁぁぁぁ!!う、うでがぁぁぁぁ!!?うでがぁぁぁぁ!!?!!」
ゴキンという音が聞こえ、痛みのあまり悶絶する小僧。
俺はうずくまる小僧の髪を掴み顔を無理やり上げさせる。
「いでででっでで!!止めて!止めて止めて!!」
「俺の目を見ろ」

痛みで泣きわめく醜い小僧の汚れた瞳を見る。
記憶を見る為だ。
もし、小僧の家庭環境が最悪なもので小僧がゆがんでしまったのなら、すぐに腕を治療し、謝罪してうちはの名に賭けて家庭から助けてろう。
仮に、そうでなかったら……地獄を見せてやる。
「シャァアアア!!!」
『ぎゃぁあああああぁあああ!!』
肩に乗っていたマタタビもコンパスを持つ子供の集団を見て察したのだろう。
子供十人に影分身して襲い掛かり、憎しみを込めた爪で顔面をひたすらに引っかいた。
顔面を血みどろにした小僧たちが、痛みで気絶した頃。
俺はこいつと気絶した小僧たちの関係性と家庭環境を知った。
この小僧は建設会社社長の息子。
母親は息子を激しく溺愛するモンスターペアレント。
教師を優秀な教師を何人もストレスで潰し、子供の不祥事は金で解決して来た。
去年の小僧の担任は逮捕された内海だ。
道理でここまで歪んだ子供が誕生するわけだ。

周りの小僧共は社長の取り巻き。
まさにこの親にしてこの子あり、って奴だ。
同情の余地はなし。
全てはこいつらが選択して選んできた事だ。
小学六年生は分別が付く年頃だ。
今回の事は出るところに出れば事件となる。
頭の悪いバカは体感させて覚えさせるのが一番だ。
世間一般では俺は悪と呼ばれるだろう。
しかし俺は、誰かを助ける為に何かを守る為にやる自己満足は正義であると考えている。
現実の正義は百を救う為に一を捨てる。
千を救う為に十を捨てる大衆の為の正義だ。
俺の正義は違う。
百を捨て、一を拾う。
世界が俺の敵になろうとも、俺の大事な物を守るために己の正義を信じて執行していく。

後日……。

六年生グループ11人は海パンにネクタイを装着した状態で駅前で自分と親たちのやって来た悪行を暴露しながらダンスを披露した。

両手を後頭部で組み、顔面に包帯を巻き付けた少年たちをバックに腕を吊るしたボロボロの少年たちによる腰を使った華麗なるダンシング。

この事件はＳＮＳで瞬く間に拡散されて、警察が知る事となった。

少年たちを保護した警察は、自分と親たちの悪事を暴露し続ける少年たちの証言を確認する為、拘留中の内海被告に事情聴取が行われた。

それにより、少年たちの証言は真実とされ、少年たちの両親は世間からのバッシングと余罪の追及を一身に受けている。

そして、保護された少年たちは駄目親の教育による被害者として扱われ、保護施設でしっかりとした教育を受けている。

その後、世間では子供の教育は学校の責任だけではなく親の責任も重要として、教育評論家の先生たちが保護者に訴えかける番組が増えた。

もう、少年たちのような子供を増やさないために……。

一匹の雄猫はその番組を見ながら彼らが早く自分たちの罪を自覚し、深く反省して更生する事と、二度と愛する雌猫のような事件が起きない事を、雌猫が好きだった鰹節を

食べ、涙を流しながら心の底から祈ったのだった。

6話

うちはの介入によって、原っぱ大戦は終結した。

小学六年生たちが駅前で右に左に縦横無尽の華麗なる腰振りダンシングが動画サイトにUPされている頃……。

木遁影分身の一体がとある理由からオリジナルから消される事なく、親不孝通りにてマダラとして活動していた。

☆マダラ（サスケの分身）☆

マタタビの件が解決したとオリジナルから報告を受けた俺は、親不孝通りでの情報収集を打ち切った。

俺はオリジナルが術の解徐をするか、戦闘で実体を維持できない一定のダメージを受けるまで消える事が出来ない。

その為、今まで足を踏み入れる機会のなかった親不孝通りを練り歩く。

辺りには学ランを着て咥えタバコをしている不良に暴走族の特攻服を着て頭に立派

なパイナップルを乗せた男達。
そして、一般大衆の中では活動しない裏のお仕事をしているやさぐれたおっさんもチラホラ見かける。
親不孝通りとはよく言ったものだ。
「ちょっとちょっと!そこのお面の人!
今からこの廃ビルで面白いショーをやるから見ていかないか?
今なら見学料千円だ。
もし、混ざるんだったら一万円な」
「……一体何のショーだ?」
うろうろと歩いていると、薄汚れた廃ビルの前でパイナップルボーイ（リーゼントの不良）が手作り感溢れる券を見せながら話しかけてきた。
きっとまともな物ではない。
正直、無視して立ち去りたいが、不良と言う人種は無駄にプライドが高く、自分のメンツを潰す奴には物理で潰して返す。
騒ぎを起こしてオリジナルに消されるまでの間、パイナップルと追いかけっこは面倒だ。
適当に相手して、立ち去るとしよう。

「おう!ここらで突っ張っていたクソガキとその妹を集団でリンチにするのさ!!
その為に色々エキサイティングな趣向を取り入れたから客を入れる事にしたんだよ。
二人とも小学生で妹も当然小学生だから、児童ポルノと特殊プレイが好きな変態中年やイケメン大学生が何人も買ってたし。
大盛り上がり間違いなし!まあ、あの変態達は突っ張っていた男の尻に興味深々のようだったが…。
まあ、そんな感じで客も入っているし、きっと盛り上がって面白いから券を買ってくれよ。」
「そうか……なら、お前にもエキサイティングな趣向を取り入れたお仕置きをしてヤロウ」
「へ?」
面から見える右の瞳が、模様の付いた紅に変化した時。
パイアップルボーイは闇に落ちた。
幻影に囚われたパイナップルボーイは四肢を動かそうとするも、何かに固定されたように動かない。
動けない四肢と暗い世界に恐怖を覚え始めた、パイナップルボーイの前に一人の男が現れた。

「今から７２時間…貴様に金的をする。
回数はプレミアム料金分の一万回だ。」
「……へ？ちょっとまっ!?」
月読の世界の中でパイナップルボーイは７２時間の金的を味わい、子孫がお亡くなりになりましたとさ。
悲鳴を上げる事無く、気絶したパイナップルを放置して廃ビルの中に侵入する。
「お客さん、チケットの提示を頼んます」
「ああ、いいだろう」
「ぐへっ!?」
受付の男にチケットと言う名の拳を顔面に叩き込み、鼻をへし折ってやる。
汚い声だ。
「は、鼻が……俺の鼻が…」
「さて、お前には子供の居場所を教えてもらおうか？」
「ひ、ひぃ!?」
男の服の襟を引っ掴んで持ち上げ、小学生二人の居場所を写輪眼で男の記憶から覗き込む。
男の記憶の中で二人の長髪の少年とツインテールの少女が捕まっていた。

一番奥の部屋か……。
人数は客を会わせて十五人。
主催者のチンピラとその護衛の武装はナイフと鉄パイプ。
この程度なら何とかなりそうだな。
用済みとなった男の意識を写輪眼で落とて、ゴミの様にポイ捨てする。
俺は、そのまま一番奥の部屋へと突き進んでいった。
……。
部屋に入ると、全裸に向かれて暴行を受けている少年。
そして、それを涙を流しながら止めてと言う少女。
観客の男たちは笑顔を浮かべながらその光景を見ていた。
実に醜悪で醜い。
「目には目を……」
「ぐほッ!?」
「歯には歯を……」
「何をすッ!?」
「悪には正義の鉄槌を」
男達の腹部と顔面に鉄拳を叩き込み、地面に転がしていく。

観客たちを全員が意識を絶ったり悶絶している斬新な光景が出来上がった所で、チンピラたちが俺を取り囲む。
「おいおい、アンタ。何、人のビジネスを邪魔してくれちゃってんの？」
「タダで済むと思うなよ？お面野郎。」
「ボコボコにした後、全裸にして変態駅の前に吊るして放置してやるよ」
「ほう？この俺を倒して吊るすだと？面白い冗談だ」
ナイフと鉄パイプを構える男達に構うことなく少年たちの元へ前進する。
「くたばれ変態野郎!!」
上段から振り下ろされる鉄パイプをひらりと躱し、輪廻写輪眼の人間道で気を死なない程度に搾り取る。
気を吸収された男は体に力が無くなり、ゆっくりと地面に崩れ落ちた。
「ち…力が……入らねぇ…！」
「一人で相手をするな!!全員でやっちまえ!!」
『おう!!』
「集団での攻撃か……確かに一人で戦うよりも効率的だ。
…俺が相手でなければの話だがな。
千鳥流し！」

『ぎゃぁあああああ!?』

右てを床に付け、雷遁を地面に流して周囲から攻撃を繰り出す男たちに電流を流して気絶させる。

……初めからこうしておけばよかったな。

俺は、少年たちを解放し、観客と主催者のチンピラたちに仕置きの暗示を仕込んだ後、自宅まで送ってあげた。

あげたのだが……。

彼らの家庭はやばかった。

両親は蒸発。

一番上でも、まだ学生である長女が年齢を誤魔化しながらイケないバイトで生活費を稼ぎ、下の妹と弟達を養っている。

弟も弟で姉の苦労を知っているから、家族を守る為に持ち前の肉体で不良共をボコって金をむしり取る。

はじめは店の手伝いなんかで金を集めようと幼い弟君なりに考えたのだが、全ての店に追い払われたらしい。

まあ、小学生を雇う事なんて普通の企業では無理だろう。

無理なのはわかるのだが、誰も助けようとは思わなかったのだろうか？

いや、無理だな。
現代の日本人はことなかれ主義だ、子供を助けようと言う人間が稀なのだ。
事実、あの観客たちの正体を知ってそれが良く分かった。
あの中には子供を教えて導かねばならない教師に大学生など大人と大人に分類される青年たちだ。
周りは助けてくれない。
ならば……。
「お前たちを俺の弟子にしてやる」
こいつらに理不尽と自分たちにとっての悪をねじ伏せる力を与えてやろう。
こうして、木遁影分身の俺はケンカを吹っかけてくる不良たちから気を吸収しながら存在し続け、マダラとして彼女たちを鍛える事となったのだ。
ちなみに、肝心のボコボコにされた観客とチンピラは数年前から変態駅と呼ばれるようになった駅で、さわやかな朝に健康的な全裸ストレッチを行った。
「いーち！」
「にー！」
「さーん!!」
「この辺に、変態パワーが溜まって来ただろう!!」

強面のチンピラから、さわやかなイケメン大学生と小学校教師に病院に勤める看護師。

彼らはすがすがしい表情で、変態に慣れて色々と悟ってしまった警察官達に逮捕された。

逮捕された男たちは、家宅捜査を受けた事により、例のごとく余罪が発覚。

観客だった男たちはただの児童ポルノ愛好家ではなく、実際に百人以上の男子児童に手を出していた変態だったのだ。

もはや主催者のチンピラなどよりも有名となった男たちは全国で批判を浴び、彼らよりも先に収監され、この事件の事を知ったハードコアな変態に少年たち以上のわいせつ行為が彼らに行われるのだった。

牢屋も地獄、世間も地獄……彼らの生きる場所は何処にも無くなっていた。

ちなみにその頃のオリジナルは……。

「サスケ、お前に精神修行を申し付ける。

黛十一段の元で一か月、修行しなさい」

「はい」

小学生たちへの暴行がバレて父フガクに精神修行を命じられた。

7話

襲撃やケンカを売ってくる不良や薬売りのチンピラ達から気と金を毟り取って、両親のいない子供たちを養っている時。

オリジナルは新幹線に乗って、北陸のとある道場宅にたどり着いていた。

☆☆☆

「はじめまして。君が…サスケ君かね？フガクから話は聞いている。

修行以外では、自分の家の様にくつろいぐといい」

「うちはサスケです。しばらくここで厄介になりますが、ご指導よろしくお願いします。」

家の前で、わざわざ出迎えてくれたのは親父殿の友人である着物と髭がトレードマークの黛　大成さん。

腰には刀を帯剣しているラストサムライである。

「私は、道場に用があるので年も近い娘に家を案内させよう」

「お心遣い、有難うございます」
玄関で挨拶を済ませた俺は、黛さんの娘に案内をしてもらう事になったのだが……。
「は、はじめましてって!!黛　由紀江でっす!!」
「…はじめまして。うちはサスケだ」
黛さんと入れ替わるように現れた娘さんは俺をギンギンに睨んで挨拶をかました。
お世話になる娘さんなので何とか、冷静に返したが男が嫌いなのだろうか？
それとも俺のようなイケメンが嫌いなのだろうか？
俺もイケメンはあまり好きではないから気持ちは良く分かる。
「では！お部屋に案内しまっす!!」
「…ああ」
彼女は右と右の手と足が同時に動いて歩いている。
新しい修行なのだろうか？
いや、どう見てもガチガチに緊張しているだけだな。
「なあ、もう少し落ち着いたらどうだ？疲れるだろ？」
階段を前にして滑り落ちるのではないかと心配した俺は彼女に話かけたのだが……。
「はひぃ!?すみませんすみませんすみません!!」
何故か謝られた。

その姿は入社初日の新人君がミスをして、上司に謝っている姿を彷彿とさせる。
「怒っていないから…落ち着け。な？」
「は、はい……」
墓穴を掘り過ぎたと自覚があるのだろう。
彼女はもはや涙目だ。
黛さん……俺よりも精神修行が必要な子が身近にいますよ。
ビクビクされながらも家を案内された俺は、道場にて精神修行の日々が始まった。
始まったのだが……。
「もう、私に教える事はない」
「へ？」
道場で座禅を組むように言われたので、ついでにゲーム時代に使えた仙術を使うための自然エネルギーの吸収をやってみたのだが…。
吸収を始めた瞬間に黛先生が匙を投げました。
それからの精神修行は道徳の授業になり、過剰な暴力は何も生まないとか、武人は高潔であるべきだとかの坊主の説法のような時間になってしまった。
そんな修行と言えばいいのか道徳の授業と言えばいいのか分からない状態が数日ほど過ぎると、とある事に気が付いた。

黛姉妹の長女、由紀江の事である。
妹は剣技に興味ないようで、子供らしく外で友達と遊んでいる。
しかし、長女の由紀江は……。
悲しいまでにボッチだった。
初めは気のせいだと思ったんだ。
ただ、剣術の稽古で忙しいからだとか、そんな理由で遊びに行かないのだと……。
しかし、三日過ぎたところで俺は決定的な瞬間を聞いてしまったのだ。
『頑張れ私！サスケさんを初めてのお友達にして、いずれは百人の友達を……。
その為には、あのような醜態を晒さないために挨拶の練習を百回です！』
ご飯が出来たので娘を呼んできて欲しいと、奥さんにお願いされた俺は、彼女の部屋の前にやって来たのだが、悲しい独り言を聞いてしまった。
心の整理を必要とした俺は、彼女の挨拶の練習が終わるまで廊下で時間を潰したのだった。
黛さん俺なんかに道徳の授業をするよりも、娘さんに人との接し方を教えてあげてください。
恐らく彼女は対人経験の少ない故にステージ３のコミュ障になってしまっている
このまま進行が進めば、彼女の脳内にはエア友達や脳内彼氏などの架空の存在を妄想

し、悲しい青春を過ごすことになる。
彼女を救うのは今しかない。
「由紀江。ちょっといいか？」
「は、はい！なんでしょうかサスケさん!?」
「ちょっと、お前に俺の友達を紹介しようと思ってな。俺と一緒に街を案内してくれないか？」
「ほ、本当でうか!?ぜ、ぜひ、お願いします!!!」
俺の話に勢いよく食いつく由紀恵。
彼女の鋭い瞳と大きな声で、その必死さは伝わってくる。
ここは、頑張らないといかんな。
「では、友達を紹介する。……口寄せの術!!」
「はう!?」
道場から少し離れた庭先で口寄せの術を行った俺。
煙と共に現れたのはマタタビの同僚であるアメリカンショートヘアの蘭丸だった。
「ね、猫さんですか？」
「お初にお目にかかります。拙者、蘭丸と申します。」
「は、はじめまして？あれ？猫さんって喋る生き物でしたっけ？」

蘭丸を見て困惑する由紀江の反応が懐かしい。
川神の人たちも初めは喋る犬と喋る猫には困惑していたんだが……。
適応力が高いせいなのか、すぐに……。
『喋る猫…ああ、うちはの？』
『うちはの猫ならしょうがないな』
みたいな感じですぐに受け止められてしまった。
あの町は俺でもおかしいと思う。
「まあ、こいつが特別なだけだ。それよりも案内を頼む」
「は、はい！そんな事で済まされる問題ではないと思いますが、すぐに案内いたします!!」
黛さんからの許可をもらった俺達はブラブラと街を散策した。
そして、黛　由紀恵に試練が訪れた。
「そ、そんな！無理です!!私には早すぎです!!」
「早いも遅いも関係ない。簡単な事だ。」
「そうでござるよ、由紀江殿。こういうのは実戦で慣らさねば成長出来ないのでござる」
そう、公園に案内してもらった俺と蘭丸は公園で遊んでいる少年少女達と仲良くなろうと提案したのだ。

「もちろん、はじめは俺から話をするから安心しろ」
「ほ、本当ですね？嘘ついたら責任を取って結婚してもらいますよ？」
「責任の使い方を間違っているでござる……なんか、心配になって来たでござるよ」
俺もだよ蘭丸。
まあ、責任云々は将来に期待して、今は友達作りを頑張ろう。
「はう!?」
「ちょっと我慢しろよ」
「おお、さすがサスケ殿。プレイボーイという奴でござるな」
由紀江の手を掴んでグイグイと子供の集団まで引っ張っていく。
自分たちに近づいてくる謎の二人と猫一匹が気になったのか、集団の中で数人が視線をちらちらと向ける者がいる。
そして、注目が一定となり距離も近くなった俺達は蘭丸に教えた秘伝の技を子供たちに披露させた。
「ぼく、らんまるでーす。ぼくたちとあそばないかい？うしろにいるのはサスケと由紀恵。
由紀恵はちょっとシャイなだけの天然ちゃんだから、なかよくなるとおもしろいよー」

お前誰だよと言う事なかれ。
彼は今、国民的人気アニメトラえもんになりきっているのだ。
昨日の夜にボッチな少女の為にと頑張って覚えてもらったんだ。
彼の頑張りに俺はここから感謝する。
「わー、この子トラえもんみたいで可愛い！」
「触ってもいい？触ってもいい？」
「肉球が至高。」
少年少女たちがトラえもんに群がり、飼い主だと思われている俺と由紀恵に許可を求めている。
ここだ！ここだぞ!!由紀江ーーーー!!!
俺は彼らに見えないようにお尻をパシパシ叩いて許可を出せと促す。
「はい!!いいです!!いいですよ!!」
数秒してようやく返事の出来た由紀江。
少年少女たちは蘭丸を撫でまくった。
「ちょ!?そこは待って欲しいでござるよ!?」
「お？オスだ」
「や、やめてーーーーーーーー!!?」

「ねえ、由紀江ちゃん。明日も遊ぼ」
「は、はい!!ありがとうございます。ありがとうございますぅ!!」
「はは、面白いね由紀江。ユッキーって呼んでもいい？」
「はい！ユッキーでもまゆっちでも構いません!!」
「え？じゃあ、まゆっちで」
こうして蘭丸の犠牲の元で明日も遊ぶ約束をする事が出来た由紀江。
おお!!さりげなくあだ名を増やしていやがる。
一人で考えたのだろうか？
こうして、黛　由紀江にご近所の友達が出来た。
帰り道の彼女は嬉しそうな表情を浮かべており、自宅に帰ると友達が沢山出来たと嬉しそうな表情で家族に報告して、俺の心を温かくさせた。
ただ……。
「子供怖い…子供は悪魔…子供怖い…子供は悪魔……」
帰り道、俺達の後ろをトテトテと歩いていた蘭丸は雄猫としての尊厳を粉々にされ、さめざめと泣いていた。
どうやら彼にはトラウマが出来たようだ。

彼を見ていると胸が罪悪感で締め付けられる。
こうして、黛家での日々を過ごした俺は黛家の皆さんに感謝されながら、川神へと帰って行ったのだった。
あれ？俺って何しに北陸に来たんだっけ？

☆おまけ☆

サスケは完全に忘れているだろう。
実はサスケが黛家に向かった日の前日、直江大和と知力を使った決闘を申し込まれていたのだ。
京の件と原っぱの件で彼の中で思う所があったらしく、サスケをライバルと見定め、男らしく決闘を申し込んだのだ。
しかし、予定の出来たサスケは直江に電話しようとしたが、連絡先を知らなかった為に同じクラスの小雪に伝言を頼んだのだ。
伝言を頼まれ、しっかりと返事をした小雪だったが家族団らんの食べ放題の店で沢山のマシュマロを堪能した彼女の記憶には欠片も残る事はなかった。
後日、決闘の為に風間ファミリーが屋上で待っていたのだが……３０分ほど放置プレ

イされた後、サスケが修行に行ったと祖父から聞いていた百代にサスケが居ない事を聞かされるのであった。

「よく来たな我がライバルよ…いや、もうちょっとカッコよく……よく来たな、我が終生のライバルよがいいか?」

彼はこの日の為に様々な準備とカッコイイ口上を考えて、暁のメンバーと遊ぶ時でも時々口にしていたようで、黒い笑みを浮かべた京に全てボイスレコーダーで録音されていたのだった。

8話

黛家から帰還して由紀恵との文通を始めるようになって一年が経過した。
一学年成長した俺達の日常はゆっくりと変化していた。
文通をしていたボッチ少女は４０人の友達に囲まれ、さらなる友達獲得の為に腹話術を身に着けたとか……。
岡本一子ちゃんは残念な事に里親のおばあさんが亡くなってしまった。
風間ファミリーとの同盟と言う形で仲良くなった俺達にもかりんとうなどを分けてくれた事もある。
再び一人になってしまった一子ちゃんだったが、風間ファミリーと暁の協力で川神百代の妹。
川神一子となった。
そして、なんか一子ちゃんを預かりたいという親戚のロリコンアル中おじさんが居たらしいが、告別式の前に何を思ったのか交番の隣で立ち小便をしたらしい。
恐らく交番の隣が男子トイレに見える幻覚でも見たのだろう。
告別式の前にそんな非常識なことをする人間に子供は預からせないとマダオがごね

る前に引き取りの話は完全に水の泡へと消えていった。
一体誰がそんなファインプレイをしたのだろうか？うちはの天才美少年かな？
後は、板垣兄弟が忍術を覚えて不良やチンピラから戦利品として金を毟らなくて済むようになったことかな？
長女は学校を卒業したのち、夜の店で働く事になり影分身を駆使してお店のナンバーワンとなり、かなりの額を稼いでいるようでサラリーマンをしていた俺よりも倍以上も稼いでおり、少しショックだった。
そんな頃の話である。

☆☆☆

「おらぁあああああ!!」
「ぶへぇぇぇぇぇ!?」
「ウチの拳が真っ赤に燃える!!」
「ぐぼッ!?」
「そーれ！」
「ぎゃぁあああああ!!」

「ふん!!」
「ぶひぃぃぃぃぃぃ!!女王様ぁぁぁぁぁぁ!!」
竜兵、天使、辰子、亜巳の四人は修行の成果を確かめる為に、不良たちとケンカをしている。
中々に順調のようだ。
気の巡りもいいし、自己流であるが中々見ごたえのある体術。
最後の一人は調教しているが……。
まあ、ここまで強くなれば彼らに敵う敵はもういないな。
つまり、彼らは俺の弟子卒業だ。
後は、教えた力をどのように使うかは彼ら次第だ。
出来れば俺と敵対しないことを心から祈る。
そんな事を考えていると後ろから何者かの気配を感じる。
気配察知ランク最上位スキルを持つ俺に、察知できない気配はない。
後ろを振り向くと柄の悪そうなおっさんが一人で立っていた。
しかし、このおっさんどこかで見たような気がする。
何処だったかな?
「へぇ。あのガキどものボスだけあって、中々やるじゃねぇか。

これでも完全に気配を消していたと思っていたんだがよ…」
「何か用か？」
「何。俺は今まで居たところを追い出されて暗い仕事をしていたんだが、犬扱いが面倒でよ。
退職して、ちょいとここで一旗揚げようと思ってんだよ。
その為にアンタをブチのめし、箔をつけてから裏社会で華々しいデビューを考えていてよ。
だからここでボコボコにされてくれや」
「断る」
「そうかい。まあ、そうだろうな……。
じゃあ、問答無用で襲わせてもらうぜ!!」
謎のおっさんに攻撃された俺は、写輪眼の力ですれすれで回避する。
中々お目にかかれないスピードで繰り出される突きを見るとおっさんは相当な実力者のようだ。
そして、一つだけ分かった事がある。
この動きは川神院の物だ。
百代に襲撃されているから間違いない。

つまりこいつは……川神院の元・師範代釈迦堂　刑部か!?
「おお、よく見ればその血のように紅い瞳……写輪眼じゃねーか？
名門のうちは一族がこんなゴミ溜めで素質が有りそうなガキどもを育てるなんて何を企んでやがるんだ？
引き抜きか？それともこの国にクーデターでも考えてんのか？
まあ、俺にはどうでもいいんだけどよ!!」
「どうでもいいなら…聞くな!!」
拳と蹴りの連打を打ち続ける。
中々に強い……ルーさん以上の強さだ。
しかし……。
俺の方が強い。
お互いにいったん距離を置くと、釈迦堂は己の必殺技を繰り出さんと闘気を高める右手に集中させる。
恐らく必殺の一撃を叩きこむつもりだろう。
俺も、それなりの技で応えよう。
「行けよ！　リング！」
「千鳥千本!!」

「は!?ふざけんじゃねぇぇぇぇぇぇ?!」
リング状に出来た気の塊が俺に突っ込んで来た瞬間、一度に放たれた大量の千鳥千本によりリングはかき消され、そのまま釈迦堂に直撃する。
千鳥千本は釈迦堂の体を突き、そのまま感電した釈迦堂の動きは完全に停止した。
「ち、ちきしょう……」
動きは完全に止まったが、まだ意識があるのは流石だと言わざるえない。
クマなら間違いなく気絶するレベルだと思ったんだが……。
「とりあえず、梅屋の豚丼を奢ってやるから話でもしないか?」
「……あんた…梅屋が好きなのか?」
「マイブームだが?」
その後、釈迦堂を回復させた俺は板垣姉弟を連れ、梅屋にて豚丼のスペシャルトッピングを奢る事となった。
梅屋が大好きな釈迦堂は梅屋の豚丼好きに悪い奴はいないと、先ほどの殺伐とした雰囲気を霧散させ、フレンドリーに話すようになった。
意外とノリがいい、さっぱりした性格のようだ。
「ほう?マダラの旦那は俺と気が合いそうだな?己の信じる道、自己満足こそが正義!
中々気に入ったぜ。どうだい?俺と一旗上げてみないか?」

「気に入ってもらえてうれしいが、俺にはやることがある。
　悪いが断らせてもらう」
「ふーん……まあ、いいんだが、そのやりたいことってなんだ？
　面白そうなら俺も一枚噛ませてくれよ」
「何かあった時に、頼らせてもらう」
「そうかい。なら、その時には声をかけてくんな。
　アンタには借りがあるしな、一回くらいはサービスで聞いてやるぜ」
　ふむ……面倒な性格のようだか、義理と人情はそれなりにある。
　川神を出た後も凶悪犯罪をした記録もない。
　悪い人間の一歩手前と言った所か……。
　だったら…。

「アイツらの面倒を頼む」
「はぁ？俺に子守をしろっていうのかよ？」
「一回だ。一回だけ気が向いた時でいい。
　アイツらを助けてやってくれ」
「あー。了解。

その頼みだけは守ってやるよ。
あと、ものは相談なんだがよ、あいつら面白そうだし、俺が育ててもいいか？
その方が面倒な俺も途中で投げ出すことはないと思うぜ？」
「いいだろう。ただし、お前の思想を押し付けるなよ」
「ん？旦那が仕込んだんだろ？そこは大丈夫だ。
さっきのケンカも見ていたが手加減なしのいい拳だったし、中々に合うと思うぜ」
こうして、彼らは俺の弟子を卒業し、各々の自己判断によって釈迦堂の弟子となった。
竜兵と天使、辰子からは泣かれてしまい、後ろ髪を引かれたが俺は分身体、いずれは分かれなくてはならない。
親不孝通りを全速力で駆け抜けてオリジナルに術を解除して貰った。
板垣姉弟の幸せを願いながら消滅し、親不孝通りのはずれに一本の木が残されていた。

本当の始まり
プロローグ

「京…」
「サスケ…」
一人暮らしの俺の部屋にやって来た仲間、椎名京と俺が見つめ合う。
俺はなんとも言えない表情をし、目の前の彼女は頬を染めている。
お互いの名前を呼んだ後、沈黙が続く中で何かを待っている彼女に俺は口を開いた。
「パンツを返せ」
「キスしてくれたら返す」
彼女は他の幼馴染達と遊びに来ていたのだが、みんなから離れて俺のパンツを物色していたのだ。
片鱗は幼い頃からチラホラと見えていた。
しかし……一体何がどうしてこうなってしまったのだろうか？
女性として綺麗に成長した高校2年生の幼馴染にムラムラしつつも頭を抱える俺であった。

☆☆☆

「ははは、またおねーちゃんにパンツ取られた上にクンカクンカされたんだね？」
「まぁな。もう慣れてしまった自分が恐ろしく感じる」
「ついでに私の肌の香りをマーキングしているのでＷＩＮ、ＷＩＮだと思う」
「いや、一方的にサスケが損してるだろ？」
川神学園への通学路で合流した小雪、俺、京と百代は昨日の事を話しながら、いつもの様に学校に向かっていた。
そして最近は常々思うのだ。
暁女子メンバーの中で一番まともなのは百代なのではないかと？
あの戦闘の申し子の百代がツッコミをしてるんだぜ？
時間の流れとは本当に面白い。
しかもだ、黒髪を伸ばして乳と尻をメロンのように成長させた幼馴染は学園の頂点に位置する美少女となっていた。
オッパイを一回でも揉まされたら一瞬で堕ちる自信がある。
勿論小雪と京も十分育っており、俺は即堕ちですよ？

あれ？俺って全然成長してなくね？

「おうおうおう!!おめーらが暁で間違いないか？」

自分の成長という物に疑問を持ち始めていると、通学路に沢山の不良がたむろして俺達を睨みまくっていた。

なんだろうか？品行方正な俺達がこんな奴らに恨まれる覚えは正直ないのだが？

「お前ら！よくも万引きの邪魔をしてくれたな!?

しかもご丁寧に犯行現場を写真撮影して警察と実家に輸送しやがって……どうやって俺の個人情報を手に入れたんだよ!!?

あの後も、悪い事したら撮影して送って来やがって!!すみませんでした、もう勘弁してください」

「この間はよくもカツアゲを邪魔してくれたな!!ジャングルジムの天辺で全裸にされて縛られたせいで風邪になるし、警察のお世話になるしで大変だったんだぞ!!

…すみません、謝りますから撮影した写真を破棄してください」

「女の子を襲おうとしただけなのに親不孝道理でよくも全裸放置してくれたな!!あの後、分身する不良に掘られてアブノーマルに目覚めそうになっちまったんだぞ!!どうしてくれる!!?

お願いですから、ガチムチ系のホモサイトから俺の写真を消してください。

昨日も襲われて腰がやばいんです」
分身する不良が気になったが、どうやら彼らは謝罪に来たようだ。
感心、感心。
上から神社のお土産の料金箱を破壊して金を盗んだり、コンビニやスーパーで万引きを繰り返す不良。
真ん中は最近の子供は金を持っていると、中学生や小学生を殴って財布をカツアゲする不良。
最後に至っては証拠を残さない狡猾な連続強姦魔、４人の少女が犠牲となった。
その他も似たような連中で、全員暁によって肉体的にも社会的にもボコボコにされた連中である。
「一人目はもう辞めたから安心しろ。二人目はカツアゲを辞めれば破棄してやる、懲りずにやったら無修正高画質でホモサイト行きな。
三人目は自首しろ、捕まったら破棄してやる。それ以外の奴らも同じな」
『はい』
「次やったら私が全身の骨を折って、テトリスしてやろう」
「男同士で濃密に絡み合うＢＬの喜びを教えてあげる」
「犬神家って面白そうだよね」

俺がデータについて話すと、全員素直に帰っていきました。
もしくは女子メンバーの怖さに、逃げ出しただけかもしれないが。
不良たちが居なくなった通学路を何事もなかったかのように再び歩き出す。
さて、帰ったら影分身で確認して削除してやるかな。
「お前らって本当に悪魔だよな……」
「うん。なのに正義の味方って言われているから不思議だよね。
まあ、彼らもやられても仕方がない事はしているけど……」
「俺様、京に石を投げたりとかしなくて本当に良かったぜ。
やっていたら今頃は……。なあ、有名になった天誅戦士マダラってサスケやモモ先輩じゃないよな？別人だよな？
知り合いだったら、もういじめはしませんって伝えておいてくれよ。
政治家や危ない奴らの末路がニュースで流れる度に背筋が凍るんだよ」
再び歩き始めた俺達の背後からやって来たのは中二を卒業した直江と前の俺を彷彿とさせる貧弱オタクボーイの師岡。
最後は京を罵倒していた青い顔をした筋肉ゴリラの島津だ。
彼の言う天誅戦士マダラとは、今世間を騒がせている謎の人物の事だ。
何でも北朝鮮の工作員を寒い冬の夜に警察署前に全裸で拘束した状態で放置。

特殊工作員達が本気で泣いている所を職員が見つけたらしい。
他にも、２３億の年金基金を横領して使い込んだ元事務次官の男を逃走寸前で捕縛。
全裸にした後、尻にローソクを突き立て火をつけた状態で警察署前に放置。
男が玄関前で汚いオブジェとなっていた所を職員が発見。
職員の話によると、ローソクの火を消そうと必死に汚いお尻を右へ左へ、フリフリしている光景が目に焼き付いてしまったようだ。
更には、下着泥棒には自分の下着を頭かぶせて全裸放置。
ともかく犯罪者は警察署前で全裸放置。
軽犯罪は相手にせず重犯罪を専門にする変質者としてマダラは有名になった。
そして、マダラに狙われた（？）この警察署は全裸警察署とネットで有名になった。
「七夕でお願いしたらガクトを全裸にしてガチムチな男達の前に捨ててきてくれるかな？」
「やめろ!!やめてください、お願いします!!」
「冗談だよ？」
「なら、その意味深な笑みを止めてくれよ!!俺様、本当に反省しているから!!」
京の冗談なのか本気なのか分からない言葉に涙目になって懇願する島津。
京は時々、昔の事を掘り出しては直江と島津の心を抉っている。

俺の幼馴染はエロかったり、電波だったり、ＢＬが好きになったり、粘着質だったりで大忙しな成長を遂げていた。

この子は一体どこへ向かって成長するのだろうか？

「みんなーーっおっはよー!!」

幼馴染の将来に不安を感じていると元気いっぱいな少女の声が聞こえた。

皆が振り返ると、そこにはスポーティ女子の川神一子が体操服のブルマ姿でタイヤを引きながら走って来た。

朝から眼福眼福。

健康な太ももがとても素晴らしい。

「おー、ワン子。今日はタイヤ二つなんだな」

「川沿いで東京都まで行ってきたわ」

「昨日は静岡だったよね？」

昔は泣き虫で、事があることにいつもプルプルしていた幼女はいつの間にか、川神と他県を往復出来る強靭な肉体を手に入れていた。

あの細い腕と足からは想像できない力だ。

ガチムチにならなかった事を心から神に感謝しよう。

「まだまだよ！一杯鍛えて、いつかお姉様と肩を並べられるくらいに強くなるわ!!」

「健気でかわゆい、マイエンジェル。どうだサスケ、これが私の妹だ」
「ああ、正直羨ましい」
汗を流して健気に頑張る一子ちゃんを撫でる百代を見ながら心の底から思う。
何で俺には妹が居ないのか……。
お兄様からお兄ちゃん…兄さんにお兄たま。
本当に羨ましいぜ。
「大丈夫。サスケには姉妹丼が待ってるから。
お父さんとお母さんには許可を得ているし、問題ない。」
「待ってるよー」
「大人になったらな」
うん、そういうのじゃないからね。
嫁も欲しいけど、俺が欲しいのは妹だからね?
特に義理の妹がいいです。
「ねえ、キャップはどうしたの?」
「消息不明」
「いつも道理ね」
風間は本日もおらず。

親父さんが冒険家のせいだろうか？アイツは本当に自由だな。
……遺跡とかで死んでないよな？
風間の話題が一瞬で終了し、全員で歩き始めた。
始めたのだが……。
「なあ、歩く時ぐらいタイヤを下ろしたらどうだ？」
「ふふん！私は何時いかなる時も鍛錬を止めないわ!!
強さだけでなく体もお姉様みたいにバインバインになるんだから!!」
「頑張れよ妹ー。成長したら一杯モミモミしてやるからなー。
ちなみに私のバストは９０だ」
!?
この場に居るすべての男の動きが停止した。
これが噂に聞いた、川神流奥義『ザ・ワールド』か!?
「お昼に牛乳飲むのだー」
「サスケ、私も飲む」
「僕も飲む」
「俺を見ながら宣言するな」
小雪と京の視線がとても痛いのです。

心配しなくても俺はそのオッパイ様で十分堕ちるよ。
これが、高校性へと成長した俺達の登校風景である。
これから何が起こるのか?それとも起こすのかは分からないが。
俺達の物語はようやく始まりを迎えたのだった。

1話

「おはようございます。今日も凛々しいお顔が素敵ですね」
「おはよう。その手を尻に向けて怪しい動きをするのは止めてくれないか?」
我がクラスＳ組に入室すると、浅黒いイケメンが怪しい動きで挨拶をして来た。
彼は学年のイケメン五人衆の一人、葵　冬馬。
川神で一番規模の大きい葵紋病院の跡取りだ。
頭もよく女子にもモテる、出来過ぎる男なのであるが……バイである。
男も女も両方いける高度な変態で、直江の尻が一番のお気に入りらしい。
「おはようさん。今日もイチャイチャ登校してきたのか?そのうち刺されるぞ」
「おはよう。その辺は俺も危機感を抱いていたのだが……」
「その前に私たちが殲滅してる。今頃はＢＬの世界に夢中」
「そうだよハゲ。犬神家ごっこしたら、来なくなったから安心だよ」
「相変わらず怖いな!後、犬神家ごっこは二度とするな!!色々な所からツッコまれるぞ」
彼は井上　準。
俺のクラスメイトであり選民意識が強く、特殊な人間の多いＳ組では比較的にまとも

な部類に入る男だ。
彼の数少ない異常な所と言えば性癖だろう。
彼は生粋のロリコンだ。
数年前から斉○さんという芸人が幼女たちの関心を集めているらしく、幼女達の関心を引く為ならと、髪を捨てた本物である。
薬局で買った永久脱毛の薬品を薬局の前で躊躇なく頭に掛けた姿は男達の間では伝説となっている。
「そういえば、今度Ｆ組に転入生が来るらしいですよ。
たしか…ドイツのリューベックでしたかね？」
「ほう。ドイツ人か……あそこは更に賑やかになるな」
「出来れば委員長のような逸材が転入してくることを祈るぜ」
「警察を呼ぼうか？」
「井上は変質者ー」
「変質者だと？俺をあんな変態共と一緒にするな！俺はただ、見守っているだけだ!!
変態共とは違って、欲望にまみれの穢れた視線で少女を汚す行為ではなく、俺の場合は父が我が子を見る神聖な行為なんだ!!断じて変質者ではないと神に誓える!!」
Ｆ組とは成績最高ランクの５０人で構成されたＳ組とは対極に存在するクラスであ

り。
成績最下位ランクの生徒たちで構成されたクラスで落ちこぼれともバカにされる事もある。
ちなみに、風間ファミリーは全員Ｆクラスだ。
俺達が転入生の話題に花を咲かせていると、教室に一人の髭のおっさんが現れた。
「おーい。おじさんが来たからＨＲをはじめるぞ」
彼は宇佐美　巨人。
我らの担任教師であり、立派なマダオだ。
代行業を営んでいるらしいが、暁に仕事を奪われつつあるようで、仕事を回して欲しいと頼み込んでくるダメな親父だ。
正直、企業努力しなさいと言いたい。
「えー。水曜に朝礼があって、木曜に人間力測定だ。
以上」
宇佐美は適度に挨拶を済ませて帰っていった。
駄目なマダオもたまには光り輝くところを見せてほしい。

☆☆☆

全ての授業を終えた俺達は、とある一年生と喫茶店で会っていた。
そう彼女は北陸から島津寮にやって来た……。
「おーう！今日もサスケはクールにハーレムだ!!
まゆっちは心を早く決めた方がいいぜ、こりゃー」
「やややや、止めてください松風!!サスケさんは私の恩人で兄的な人で、恋愛感情は……」
俺と文通していた黛　由紀江だった。
彼女は心の治療の為に川神にやって来たらしい。
なんでも、腹話術の練習にのめり込んで多重人格になってしまったのだ。
黛　大成さんが娘の為に作った手作りのストラップ。
彼女は腹話術の人形として父の想いが籠った、このストラップを選んだ。
そして、キャラクター性を作るために名前から始まり、理想の友達像を追加していき……。
最終的にはストラップを持った状態で現れるもう一人の由紀江が誕生してしまったのだ。

ボッチから二重人格者にクラスチェンジするなんて…本当に不憫な子だ。
「恋愛感情はないと言いつつ、その表情。
大人しそうな顔してサスケを狙るとは……いやらしい」
「松風はマシュマロ食べる？」
「い、いやらッ!?」
「まゆっちはいやらしくないぜ、ただムッツリなだけなんだ。
後、オイラは付喪神だからマシュマロは食べれないだよ。
ごめんなーこゆっきー。」
まるで本当にもう一人の人間が居るのではないかと思われる会話に感嘆する俺。
練習している時、目標にしていたと言っていた、いっこ○堂さんを超えたんじゃね？
「そ、それと、島津寮の方の事で聞きたい事があるんですが……」
「なんだ？」
「一人はサスケさんのグループ暁と同盟を組んでいる方なんですよね？
ご挨拶に北陸のお土産を渡そうと思うのですが……少し不安で」
「ああ、直江は自称、俺のライバルで頭のいいモヤシだ。
源は同盟グループに所属していないが……まあ、ツンデレ？ガラが悪く不機嫌そうに見えるが、悪い奴ではないから大丈夫だ」

「そ、そうなんですか？安心しました。
正直、直江さんは私の…お、お尻に視線を感じたり、源さんはいつも不機嫌そうに見えたので怖かったんですが、安心です……」
「訂正する。直江には近づくな」
知り合いの女の子に尻マニアを近づけさえるわけにはいかない。
「直江はお尻が好きなんだね？今度からかってあげよう」
「大和はお尻好き……サスケは？」
「ッ!?」
少し黒くなった京の発言の後、小雪の一言で空気が変わった。
何？公衆の面前で性癖を暴露しろと？
周りのお客さんとウェイトレスのお姉さんもこの手の話が気になるのか、こちらをチラチラと伺っている。
「大人になったらな」
後日、後輩の尻を視姦したとして、ファミリーと暁女子から冷たい視線を一身に浴びる事になった直江。
彼は、目に涙を溜めながら何度目なのかすっかり忘れてしまったライバル勝負を仕掛けてきたのだ。

その内容は……。

「今度来る転入生の性別を男か女かを当てる賭けをやる…。

お前は投票に参加し、男か女に賭けろ…。

正解すればお前の勝ち、間違えたらお前の負けで、負けた分の食券を貰う……」

彼はゾンビのような動きで学校にたどり着いた。

彼の今後が幸福であらんことを……。

☆☆☆

「たるんどる！喝っっ!!!」

朝礼で毎度おなじみである学長である爺さんの喝が飛ぶ。

しかもただの喝ではない。

元武神と謳われた爺さんの声は周囲の空気を振動させた。

相変わらず滅茶苦茶な爺さんだ。

「お主ら…名誉や金、力に飢えておらんか？

男や女はどうだ？飢えておらんか？

欲しいなら奪い合い、つかみ取りなさい。

競い合いながら切磋琢磨していきなさい。
その為に決闘と言うシステムも用意しておる。
物事を決定し、己の意思を貫く為に活用しなさい。
そして、何かをつかみ取ってみなさい。
平凡な人生もいいじゃろう。
精神は腐っていきそうじゃが、それも人生。
ただ、その人生でも一定の知力と体力は必要となってくる。
最低限はここで学び、鍛えなさい。
願わくば、みんなが何かしら野心を抱いた飢えた若者達である事を願うぞい。
以上、ラブレターとファンレターは目安箱に入れてくれ」
爺さんの深い言葉に誰もが真剣に聞いていたのだがいつも通りのオチで空気が冷めていく。
あの爺さんはブルマやスク水大好きな所と、未だにモテたいと言う野心がなければ、かなりの人気がでるだろうに……。
なんか、後輩には人気が高いのにヤリたいオーラ出しまくって同級生に引かれている島津の姿と重なる。
「そういえば、F組の転入生は男らしいですよ。」

「急になんだ？」
「いえいえ、久々にライバル勝負をすると聞いてしまったので情報を提供しようかと……。
サスケ君はどう思いますか？」
教室に向かう俺の背中に葵が声をかけて来た。
どうやら、ライバル勝負の事を聞いて助言に来たらしい。
だが、俺はもう決まっている。
「女」
「……それは何故ですか？参考までにお聞きしたいのですが？」
情報を信じない俺の答えに疑問を抱いた葵の質問。
正直女と答えたのは俺の希望だ。
直江は頭を使う。
勝負する内容は常に頭脳戦。
将棋や囲碁、誰もが知らないような豆知識に小ネタ。
勝利をもぎ取る為なら、使える者は第三者でも使う男だ。
今回の噂も直江が流した物だろう。
真実かブラフか分からないのだったら自分の好きな性別を答えた方がいい。

正解は二分の一なんだ、運が良ければ当たるだろう。
しかし、正直のそのまま答えるのもなんかかっこ悪くて嫌だ。
サスケプレイを目指す者としては、もうちょっとカッコよく答えたい。
ならば……。
「その情報はブラフで、直江の差し金だ。
あのクラスには一人女子が多い為、男が入ると普通は思うだろう。
なのに男だと後押しするこの噂は怪しい。
だから女だ」
「なるほど……流石はうちは一族の天才。
物事の本質を見抜くその観察能力は貴方の写輪眼が特別という証なのでしょうね。
僕と同意見の回答に胸もドキドキですよ」
「俺は女が好きだ」
「え？京と小雪が好きすぎてたまらないって？」
「え？サスケがデレたの？」
『!?』
俺と葵のホモ野郎の言葉に反応する京と小雪。
そして、小雪の言葉に反応する女子。

安心してください、デレてますよ！
ムッツリ童貞なだけなんです。
なので……。
「デレてない」
と、答える俺でした。
結婚は職と貯金が貯まってからね。

2話

☆☆☆

さわやかな朝、俺は目を覚ますと……。

「おはようサスケ」

「ああ、おはよう」

見慣れた美少女の顔面が目の前を圧迫していた。

それにしても凄いな…俺。

この光景に慣れちまったんだぜ?

「タバスコを抜いたサスケ専用の朝ごはんが出来てるよ。

私が朝ごはんになってもいいけど……」

「大人になったらな。

それと、制服に着替えるから出てってくれ」

もう、自分の家の様に侵入してくる幼馴染にたいしてツッコミをする事無く、素早く着替えた俺は、京達が待つ食卓へ向かった。

「おはよー。朝ごはんにマシュマロ乗せてみたんだけどサスケもやってみる?」

「遠慮しておく」
「はい、味噌汁とご飯にたくあんね。お茶はいる？」
「いる」
食卓にたどり着くと、小雪と京が椅子に座って食事をしていた。
小雪の献立は小雪スペシャルと言う名の、猫の餌。
ホカホカのご飯にマシュマロが大量に盛られており、米が見えなくなっており、味噌汁もマシュマロに埋め尽くされている。
京はタバスコで染まった赤いご飯と赤い味噌汁。
通称生ごみである。
そして、俺の朝ごはんは普通の白い米にほんのりと刺激のある赤みそだ。
「おー、我らが愉快な仲間たち今日もさわやかな朝だなぁ」
俺達が朝食を楽しんでいると、もう一人の幼馴染が乱入して来た。
百代である。
彼女が朝早くわざわざ家に来るのは稀であり、こういう時は決まって……。
「金貸してくれ！」
金の問題である。
勿論そろそろ額が許容範囲を超え始めていた俺達の答えは……

「断る」
「ヤダ」
「お断り」
拒否である。
「頼むよー。北都の拳の最新刊が出るんだ」
「……」
拒否された百代は最終手段に出た。
俺を抱きしめ己の体をスリスリしているのだ。
腕に感じるムニムニだったりムチムチだったりで俺の脳内は大忙しだ。
今の俺に答える余裕などない。
「サスケ、モモ先輩に堕ちたら三人で囲い込むからね」
「完全に包囲する」
そんな俺の心情を理解しているのかしていないのか。
京と小雪の言葉に幸せと恐怖を覚えつつ、朝飯を食べる事の出来ない俺だった。
幸せ…な……ん？
美少女だがご飯が全てマシュマロになる少女。
美少女だがオープンなＢＬ好きで劇物大好きなインモラルな少女。

そして最後は、武神の称号を祖父から受け継いだ無敵の美少女にして金遣いが荒い。
戦闘欲はなりを潜めたが、女子力が低く脳みそが筋肉で出来た少女。
そんな三人に囲まれた新婚生活……。
あれ？これって幸せか??
彼女たちの中身をしらない男達なら嫉妬の嵐は間違いない。
俺も呪いと殺意を届ける自信がある。
ただ、中身と具体的な結婚生活を考えたらどうだろうか？
ま、まあ、女性は結婚したら変わるって言うし？大丈夫だよね？
……。
…。
ちょっとだけ、現実を知った朝だった。

☆☆☆

本日は人間測定の日。
まあ、身体測定とスポーツテストの事である。

男は己の身体能力と身長の成長に期待し、女は己の内なる闇（脂肪）と向き合う事になる。
そして俺達のクラスでは変質者が現れる。
「ああ、さすがサスケ君。引き締まった体が最高ですね。
さあ、じっくりねっとりと計測しましょうか」
「井上……お前に決めた」
「お、おう。俺は基本若の味方なんだが、今回はお前の味方をしてやるよ。
だから、写輪眼で若を睨むのは止めてくれ」
メジャーを持った変質者に襲われそうになったがハゲにヘルプを頼んだ俺だった。
いつかあのホモヤロウの息子を亡き者したいと思う。
「じゃあ、スポーツテストが終わったら適当にバナナでも食って教室に帰れよ」
「アンタは本当にやる気ないんだな」
「そりゃあね……おじさんそろそろ体にガタが来ててさ、若い奴らを見てると惨めになるのよ。
最近だと腰が特に……」
「……ゆっくり休む事をお勧めする」
「ありがとよ」

宇佐美を見送った後、俺達は普通にスポーツテストの項目を消化するのであった。

☆☆☆

人間力測定が終了した放課後のとあるクラスにて……。

「男子の諸君。集まってくれたことを感謝する

この会議の中では私の事はエロと呼んでください」

「何で敬語？」

「脳内保存されたブルマを使って、さっきトイレで自己処理してきました。

今の私はエロが控えめで冷静であり賢者なのです」

「それで？エロはこれだけの人数を集めて何がしたいんだ？」

筋肉の生徒の質問に対して、チョークを使って後ろの黒板に議題を書き込むエロ。

その議題は……。

「ズバリ、『モテる為の会議』です」

「おお！俺様にピッタリな議題じゃねぇか!!」

「彼女なしの選ばれし者（童貞）の諸君は今日の人間力測定の時、イケメンたちのせいで屈辱を味わったはずです。

そこで、我々がバルハラ（卒業）に至る為の会議を行いたいと思います」
「で？具体的にどうするの？てか、よく僕たちが童貞ってわかったよね」
「ムッツリ。私には童貞センサーがあり、卒業した人間とそうでない人間を見分ける能力があるのです。
さて、具体的に……非常に胸糞悪いですが、イケメン五人衆のモテる原因を明らかにし、私達も実践すれば……」
「俺様達もモテる！童貞も卒業できるって事だな!!」
「その通りです筋肉。この会議が私たちに課せられた女体を謎を解き明かす第一歩となるのです」
『おおぉぉぉおおお!!』
エロの言葉で童貞たちが興奮の雄叫びを上げる。
「では、彼らの女子受けポイントを上げていきましょう。
まずは……そこの尻。君からお願いします」
「尻って言うの止めてくんない!?」
「面倒なヤツだな…じゃあ、ヤドカリでいいんじゃね？」
「では、ヤドカリ。貴方の視点で彼らのモテポイントを答えてください」
突然指を刺された尻…もとい、ヤドカリは自分の考えを述べた。

「身長が高い」
「それは私に死ねと言っているのと同じですが？
　殺しますよ？パンツおろしてホモたちの花園へ放置しますよ」
「おお、俺様にはマッチしてんじゃねぇか!!さすが軍師!!目の付け所が違うぜ!!」
「筋肉ムキムキではなく、そこそこで引き締まっているモデル体型」
「おい尻。ちょっと表に出ろ」
「落ち着きなさい筋肉。尻の報復は後にして重要参考人の話も聞きましょう」
「重要参考人？」
「ハゲロリコン！お願いします!!」
　現れたのはハゲでロリコンの男子生徒だった。
「なんでこのロリコン野郎が先生なんだよ。こんなハゲがモテるわけないだろう」
「…筋肉。見た目と性癖で人を判断してはなりません。
　彼はこの中で唯一、女子に告白された経験を持つ人間なのです」
『!!?』
　エロの言葉で震撼する教室の男達。
「そうか！ハゲロリコンはその性癖故に女性に対して消極的、思春期特有のいやらしい目や性的な目的で女子に接近する事がないから大人に見えてモテるんだ!!」

「そうか……でも、俺様無理!!この熱いパトスに嘘はつけねーぜ!!」
「私も無理です。２４時間エロい事しか考えていないので不可能と言えましょう。
ですか、彼の境地に至れば必ずモテると判断されます。
ですので、この議題で最後まで良案が浮かばなかったら、血反吐を吐きながら彼を見習いましょう」
苦渋の選択を突き付けられた男たちはこの後も話し合った。
何とか熱いパトスを封印することなく、彼女が出来る方法はないかと……。
そして、一人の男…ムッツリが議題の核心的な部分にダイレクトアタックする一言を言った。
「やっぱり…男って顔なのかな?」
『それ……言ったら終わりじゃないか…』
男達は心の中では分かっていたのだ。
それでもモテたかった。
モテて気になるあの子と十八禁な行為を朝から晩までやってみたかったのだ。
「だったらさ……二年のイケメンを殲滅すればいいんじゃね?」
全員が絶望する中で一人の男子生徒がポロリと口をこぼした。
「だが、奴ら最強が…うちはサスケが動くことになる」

「ハンデを貰ったらどうだろうか？目を縛るとか？
　そして全員でズボンを下ろせば……」
「その状況にどうやって持っていくんだ？」
　不穏な会話が続き、彼らの計画が形を取り始めた事を察知したヤドカリは戦線を離脱しようとする。
　しかし……。
「ヤドカリ軍師…頼めますか？」
　エロの化身に捕まってしまった。
「いやいや、無理だから。武神を倒す化け物を相手に肉弾戦は無理だから」
「何を言っているのですか？私たちは肉弾戦をするのではありません。
　ただ……」
「ただ？」
　諭すようなエロは目を見開き、ヤドカリに答えた。
「あの腐れイケメン共をどんな手を使ってでも辱めて、俺達がモテたいだけだ!!!」
　見事なまでに腐った答えである。
「モテたいのは俺も一緒だが断る。デメリットしかない」
　エロの誘いを断るヤドカリ。

彼の言うように受ける理由はないし、仮にだ。
成功したとしても電波とマシュマロに追い回されてＢＬ好きにされるか、犬神家にされるかのどちらかだろう。
ヤドカリはエロの手を振り払い、扉に手を掛けた。
「逃げるのか？」
筋肉の言葉で止まるヤドカリ。
「お前、うちはサスケのライバルなんだろ？倒してみたいと一矢報いてやろうとは思わないのか？」
「…筋肉。お前、何を言って……」
「本当は気づいて居るんじゃないか？いつも豆知識だとか誰も知らないクイズや転校生のトトカルチョみたいな勝負ばかりしてよ!!
知っているか？勝負が終わった後、モモ先輩に京達や女子たちに『アイツせこいよな』って、言われてんだぞ!!
男ならぶつかって行けよ!!ここで逃げ出したら俺様はお前を軽蔑するぜ、大和!!」
「その通りだぜ、大和!!ここで男を見せれば女子の好感度は鰻登りだ!!」
『直江！直江！直江!!直江!!』
エロという欲望によって脳が一時的に進化した筋肉は無駄にカッコよく、男達の直江

コールがヤドカリを引き留める事に成功した。
「僕…筋肉の知力が上がったところなんて初めて見たよ」
「ムッツリよ。それだけエロは偉大なのさ。
じゃあ、俺は小学校に寄る予定があるから先に帰るわ」
こうして、会議は終了した

3話

☆☆☆

木遁による分身変化のマダラはオリジナルと情報を共有しながら何年も裏で法律で裁けない悪党を裁いてきた。
彼のターゲットはいじめっ子から不良へ不良からチンピラへチンピラから政治家や警察などの重要人物まで伸びていた。
そして、分身マダラはとある巨悪を知った事で思った。
この日本は、根本的に変わる必要がある。
機密漏洩や不倫をするエリート警察官や５０００万のバックを欲しがる知事なんて日本の闇の氷山の一角に過ぎない。
ならば俺が変えてやる。
マダラは消える際にオリジナルにバレないよう、己の意識を自殺に失敗した男に心転身の術で乗り移った。
勿論、そんなに都合よく自殺未遂の男が見つかるわけがない。

マダラの協力者が病院から手配したのだ。
「彼は酸欠で脳死したと判断されていたのですが……どうやら仮死状態だったみたいですね。
精神の方はどうですか？」
「いや、この男の精神は存在しない。
どうやら脳死はしていたようだが……不思議なものだ」
「…恐らく、貴方が脳に侵入した事で脳が活性化して復活したのではないでしょうか？
脳死から生き返る方もいるらしいですら、本当はどうなのか分かりませんけどね？
それよりもお風呂に入ってきたらどうですか？
その人は一週間以上も体を磨かれず、実験の為にと放置状態でしたからね」
「……もう一度、聞く。この男に家族は本当に居ないんだろうな？」
「ええ、いませんよ。彼は昔全てを失い、闇社会に堕ちた人間です。
資料によると、殺人に強姦と様々な凶悪犯罪を犯しています。
そんな状態になったのも組織で作られた薬の実験体となった末路。
使い道がないからウチが購入し、臓器販売と臓器移植の為に此処で保管されていただけですから」
「ならいい。俺が風呂から出る前にアレを用意しておけ。

すぐに移植する」
「ええ、ちゃんと用意しておきますよ。
うちはの最強瞳術…写輪眼を」
分身から本物になったマダラは風呂上りに培養液の入った試験管に保管されている写輪眼を片目に移植し、計画をじっくりと進めていく為に動き出したのだった。
例え、この身が闇に堕ちようとも自分の道を突き進んでやる。
オリジナル。もし、この俺に敵対するなら容赦はしないぞ。
いや…奴も俺だ。
この肉体と写輪眼を慣らした後、仲間にするのもいいかもしれないな……。
本当のうちはマダラとなった男の移植した血のように紅い瞳は闇の中で怪しく光っていた。
「使えんな。うちはの細胞を摂取してもこの程度とは……」
死ぬ覚悟で劇薬を使えば、十分は力を発揮できるだろう。
まあ、それでもオリジナルには届かない。
とある施設の地下で体を慣らしていたマダラは自分の力の弱さを実感していた。
「では、新たな肉体を手に入れる為にエリア５１に赴きましょう」
そこに現れた協力者。

彼は人のよさそうな笑顔でマダラに提案をする。
「エリア51……確か、コイツの研究の大本だったな。
まだ、他にも研究していたのか？」
「ええ。うちはのクローンですよ。
まさか、写輪眼だけだと？九鬼では極秘に過去の偉人を現代に蘇らせている時代ですよ。
マダラさんに適切な肉体もあります。
資料をみますか？」
「アメリカの上層部とのパイプもあるのか？」
「ええ。お金と女と色々接待して薬を盛れば、ペラペラと喋ってくれます。
昔からある手段ですが…いやはや、基本が最も効果的である証明ですね」
協力者から資料を受け取ったマダラは資料を読み、自分が欲する条件に適した肉体を探し始めた。
「おや？若い個体をじっくり見ていますが…心境の変化ですか？
以前なら、大人を選んでいましたよね？」
「心境の変化……というよりも、単純に戦闘能力の高い個体が望ましいからな。
態々寿命が少ないクローンで死にかけの大人を選ぶ必要はないだろう」

「…そうですか。では、私は飛行機の準備をしてきますのでこれにて失礼します」
資料を読みふけるマダラを置いて、地下室から出ていく協力者。
彼は地上に向かうエレベーターの中でほくそ笑む。
「やれやれ、ようやく暗示が効いてきましたか……。
コレの視力も無くなって来た上にストックも無くなって来たし……丁度いい機会です。
ストックを貰いに行く度に、金とうちはサスケの細胞をよこせとうるさいアメリカのバカ共と手を切りましょう。
ついでに彼らの研究データとストックもマダラに回収させれば……」
口を三日月のようにしながら細目を見開いた協力者の瞳は通常の写輪眼とは違う、模様の入った写輪眼が浮かんでいた。
「本物が何者かは知りませんが……せいぜい私の野望の為に働いてください」
この一週間後、うちはマダラを名乗る男と複数の人間がエリア５１の研究所を襲撃し、研究成果を根こそぎ奪われた事でホワイトハウスを震撼させる事となる。
エリア５１にて新たな肉体を手に入れたうちはマダラ。
彼は川神へと戻って来た。

「さあ、計画の時が来た!!」
正義の味方であるマダラを変えた闇。
昼の世界と夜の世界。
その間を取り仕切る夕暮れの闇の組織
「この写輪眼はすべて、第二次世界大戦で活躍した当時のうちは最強の弟であるうちはオビトの物です」
「我々の計画は写輪眼により、ネットワークやテレビを通じて人類を一つの幻術に落とす『月の目計画』を行います。あなたも協力してください」
野望に洗脳される正義。
師匠と弟子が戦う忍術バトルアクション
「師匠!あんたは言ったな!!?周りに悪と言われようとも自分の正義を貫く為にこの力を使えと!!
今がその時だ!!三門解!!」
「竜兵!!」
「中々の闘気…だが足らん。」
敗れるかつての弟子。
「おい、うちはの旦那よぉ。テメェは何をしているんだ?」

「釈迦堂か…。なに、こいつらが協力を拒んだのでな。再教育をしていた所だ。」
「……ああ、クソ！どうしちまったんだろうなぁ俺」
「ん？」
「傷ついたコイツ等を見ていたら、すっげぇ腹立ってきたぜ」
「ほう？家族愛と言う奴か？」
「ああ、そうだな。なんかそれ、しっくりくらぁ。
俺の家族に手を出すんじゃねぇぞぉおおお!!」
衝突する師と師。
それに駆け付けるオリジナル。
「お前は一体……」
「ほう…もう来たのか……。計画が前倒しになるが、構わんだろう。
お前の瞳は頂いて行くぞ!!」
ぶつかり合う写輪眼と写輪眼。
彼らの衝突で大地は抉れ、町が半壊した。
「俺の理想の邪魔をするんじゃない!!貴様はここで消えろ!!何もできずに燃え尽きろ!!」
「世界よりも身近な人が大切で、何がいけないんだ!!」

「マダラーーー!!」
「サスケーーーー!!」
ぶつかり合う理想と信念。
変人集まる川神で、始まる頂上決戦。
世界か大切な人か…君は誰を救う?
『ロードオブＭＡＤＡＲＡ―勝つのは俺だ―』
刮目して見ろ!!

「と、こんな感じでいいか?」
「いや…。ツッコミ所があり過ぎて……なんとも言えない」
立派な女子高生となった板垣天使はゲーム研究部の友人たちと新入部員獲得の為にゲームを作る事になったのだ。
しかし、ゲームのプログラムが苦手な天使はゲームとＰＶのシナリオを任されたらしい
そこで暁に依頼をし、一方的であるが知り合いである俺が、寝る前にコツコツと参考程度に仕上げたのだ。

「依頼した私が言うのもなんだけど、師匠が主人公のゲームって売れるのか？仮面だし変質者みたいな恰好だし……。

まあ、キャラを差し替えれば使えるか？色々言いたいことがあるけど、これでいい」

「じゃあ、報酬を貰おう」

「ああ。すみませーん豚丼一つ」

「おう!!」

原稿を鞄にしまった天使は安心した表情で席に置かれた水を飲む。

「ぷはー！これで安心したぜー。ウチ、全然文才がないから困ってたんだよ」

「それならよかった…ただ、今後は一人でやることをお勧めする」

「いやぁ。ウチはゲームで遊ぶのが専門だからさ、作るのは難しいんだよ。

辰姉達は全然頼りないし、それぞれが修行や勉強で忙しいからな……」

溜息をつく天使。

その姿からは昔の様な危険な雰囲気はなくなっており、順風満帆な生活を送っているようだ。

そして……。

「ほい！豚丼一丁!!うちはの兄ちゃん悪いな。バカ弟子の宿題を手伝わせちまって……。

とろろは俺のサービスだ」
「…ありがとうございます」
一番驚いているはこの男、釈迦堂の変化である。
キャラ設定の参考にすると天使の話を聞いた時は本当に驚いた。
板垣家に寄生していた彼だったが、出される飯が野菜中心であり、長女に抗議するも金を払えと言われて撃沈。
マダラの活躍で不良も減り、カツアゲが出来なくなった所で梅屋の職員募集の張り紙を発見。
天啓を受けた彼は即日で面接し、梅屋に対する熱い思いによって見事に面接に合格。
仕事初日の賄が最高だった為に金目的というか、賄目的で毎日出勤しているようだ。
まともな社会人になったようで感心だ。
こうして、依頼を完遂した俺は豚丼を平らげ自宅へと帰っていった。

☆☆☆

さて、本日はいよいよ転入生が来る日だ。
俺は女に賭けたが一体どんな転入生がくるのだろうか？

ワクワクしながらいつもの様に暁と風間ファミリーと変態橋を渡る俺達。
「うちはサスケ。今日転入生がやってくるが…本当に女子でいいんだな？」
「ああ、俺は女子で構わない」
「……つまりお前は女子が大好きなムッツリスケベなんだな？」
「ああ、俺は女性が大好きなムッツリスケベなので女子一択だな」
そんな中、俺と直江は橋を渡る前から転入生を男子に変えさせようと心理的作戦に出る。
しかし、そんなものは効かない。
仮に直江が女子でおっぱいを揉ませてくれたのなら速攻で変えてやるがな。
「もうやめろよ大和。お前の負けだ」
「ちくしょぉおおおお!!」
「いいじゃねぇか大和。俺達には例の作戦があるだろ？」
往生際の悪い直江を諭す風間と島津。
ようやく観念したのか、悔しいと力の限り声に出す直江。
そこまで悔しいのか？
自称ライバルは大変だ。
「失礼。うちはサスケ君かね？」

「はい、そうですが……」
横から声を掛けられたので、声の主に視線を移すと軍服のおじさんが立っていた。
何かヤバい物を本能的に感じ取った俺は、久々の敬語で応対する。
「敬語のサスケは珍しい」
「久しぶりに見たよ」
「付き合いが長いが本当に珍しいな」
京と小雪と百代の三人が何か言っているがそれどころではない。
目の前の人物は危険な香りというか、面倒な雰囲気と言う物をバリバリ感じる。
ここは、適当に応対して去っていくのが吉である。
その証拠に保身に長けた直江が風間グループを自然な形で退避させた。
この人は色々な意味で危険なのだ。
「ふむ……フガクの息子にしては少し細い印象を受ける。
強さはどうかな？」
「な!?」
いきなり振るわれた拳を回避する俺。
中々に鋭い突きだ。
常人なら脳を揺さぶられて終わるだろう。

「ほう、避けたか。噂通りの実力…か？少し、君の評価を修正しよう」
「アンタ、父上の知り合いか？いきなり殴りかかってくるなんて父が何か失礼でも？」
「いや。国境警備隊隊長である君の父親とはそれなりの中だ。
一度任務に接触して殺し合った事はあるがね？」
中々に物騒な関係のようだ。
「……業腹だが、一時的に君の事は認めよう。
もし、君が私の大切な者に傷を付けたら、軍が君を抹殺しに行くので覚悟しておくように」
そう言い残して、おっさんは去って行った。
一体何者だったんだ？
呆けながらも学校に辿りついた俺達は、ＨＲを……
「クリスティアーネ・フリードリヒ!!
ドイツ・リューベックより推参!!この寺子屋で今より世話になる!!」
ヒヒィーン!!
始める事が出来なかった。

4話

転入生の度肝を抜く登場に驚かされた後、一体どういう流れがあったのだろうか？
転入生と一子ちゃんの決闘がグラウンドにて行われることになった。
「へぇ、中々美しい女性ですね。
結構興奮してしまいます」
「それを態々俺に報告するのは止めてくれないか？」
「そう、サスケは私達を見ていればいい」
「サスケ…浮気？」
「おいおい、うちははまだ結婚していないから浮気でもなんでもないと思うぞ？
美しい物に惹かれるのは男の本能みたいなものだ許してやれよ。
そして、俺もまた美しい少女達に惹かれた哀れな被害者。
犯罪者や変態と罵られる理由はないんだぞ？」
京と小雪から俺を擁護する井上。
しかし、悲しい事に二人には彼の声は届かなかった。

いや、届いているが無視を決め込んでいるようだ。
「ねえ、反応してくれない？変態とか言ってもいいから無視はやめようよ。
かなり心に響くんだぜ？」
心に傷をつけられた井上は、話をしようと縋りつくも二人に徹底的に無視される。
最後は葵に慰められていた。
「さて、サスケ君。
早速ですが彼女たちの戦いを実況してもらえますか？
彼女たちの戦闘データは必要になる可能性があるので」
「それくらいなら井上でも出来るだろう」
「準は……」
「ああ、癒される……小学生は最高だぜ」
慰められた井上はまだ、本調子に戻らなかったのだろう。
俺達から少し離れた所でとてもいい表情で幼女の写真を眺めていた。
「このような有様になっているので……」
「分かった」
俺の仲間がやらかした事が原因なので素直に協力をすることにした。
……。

俺達の会話が終わり、数分の時が流れると学園長である爺さんが現れた。
爺さんが今回の決闘の議の審判のようだ。
「これより川神学園伝統の決闘の議を執り行う。
二人とも、前に出て名乗りを上げるがよい！」
爺さんの言葉によって湧き上がる歓声の中、爺さんの居る野次馬達の中心に現れた二人の女子。
「二年Ｆ組　川神一子!!」
「ワン子ーー！頑張れーーー!!」
「大和撫子の力を見せつけてやれーー!!」
一子ちゃんの名乗りに声を出して応援するＦ組アイドルの小笠原　千花と島津。
彼女の努力を知っているので、俺も心の中で応援させてもらおう。
「今日より二年Ｆ組！クリスティアーネ・フリードリヒ!!」
「クリスちゃーん！気を付けるんですよー!!」
「ああ、委員長。俺も応援されたいぜ」
「期待しているぞ新入りーーっ!!」
そして、自分の名乗りを上げる転入生。
クリスティアーネか日本語が上手だな……美人だし可愛いし記憶しておこう。

そんな彼女はロリな甘粕ちゃんと風間に応援されていた。
一部変な言葉が聞こえたが無視しよう。
「ワシが立ち合いのもと、決闘を許可する。
勝負がつくまでは何があっても止めぬ。
しかし、勝負がついたにも関わらず攻撃を行おうとしたら、ワシが介入させてもらう。
良いかな？」
「承知したわ!!」
「承った」
爺さんの確認に承諾する二人。
いよいよ決闘が始まる。
「ん、スカートで戦うんだよなクリスちゃんは……
少しワクワクとした気持ちで開始の合図を待っていた俺に小さな声だが決して聞き逃せない島津の声を、俺は拾った。
そしたら何故だろう？
視界が滅茶苦茶クリアになりました。
「おや？わざわざ写輪眼を使って観察していただけるとは…後で僕の尻を差し出す必要がありますね」

「ッ!?」
「いらん」
　どうやら条件反射で写輪眼を発動させてしまったらしい。
　それを葵は何を勘違いしたのか自分の為にやっているのだと思いやがったので尻を差し出そうとしたが俺は当然拒否した。
　背中に張り付いていた京の喜びと絶望をなんとなく感じた。
「……」
「あれ？お姉ちゃん。どうしたの？悲しい事があったの？マシュマロ食べる？」
　仲の良い二人の姉妹を放置しつつ、二人の少女に視線を集中する。
「では……尋常に、はじめいっ!!!!」
「勝負!!」
「いっけぇぇぇぇぇぇ!!!!」
　レイピアを引き抜き、一子ちゃんに突っ込むクリスティアーネ。
　それを薙刀で応戦する一子ちゃん。
「間合いに入らせないわ！」
　その言葉と共に繰り出される斬撃の嵐。
　刺突武器であるレイピアを使わせないつもりなのだろう。

視線はスカートに集中しつつ、葵への解説を行うことにした。
「一子の攻撃が単調だ。
読まれて完全に回避されている。
転入生のクリスティアーネは様子見って所だろう」
「へぇ。僕から見たら川神さんはハイレベル過ぎて単調には見えないのですが……。
さすがですね。
そして、川神さんの攻撃をよけて金髪を躍らせる彼女にはとても興奮を覚えます」
葵の言葉の通り、俺も金髪には多少の興奮を覚える。
しかし、パンチラが見えない。
「ほー。わざわざ写輪眼を使って決闘を見るなんて珍しいな。
転入生の技をコピーする気か?」
「……クラスメイトの解説に使っているんだ」
「ま、お前ならそうだろうな。
そもそもレイピアをお前は使わないし」
俺の横に現れたのは百代だった。
頼むから集中させてほしい。
俺はパンチラを拝むのに忙しいんだ。

「転入生の目が慣れてきたみたいだな」
「…ああ、ここから反撃だ」
百代の言葉通り、彼女の高まる気を腰回りから観測すると反撃が始まろうとしてのが予想出来る。
さあ、パンチラの時は今ぞ!!
「やー!!」
「は、疾いっ……!?」
クリスティアーネから繰り出された素早い突きをかろうじで避ける一子ちゃん。
くそぉ!!スカートが翻らない!!
「お前はどう見る?」
「転入生が優勢」
「だな」
「いやー。早い突きでしたね。
僕も驚いてしまいました。
ああ、モモ先輩。今度お茶でもいかがですか?」
「断る」
「残念」

葵が百代に振られたと同時に間合いを取る二人。
どうやら仕切りなおすつもりらしい。
「次で仕留める」
「上等よっ!!」
クリスティアーネの勝利宣言に気合を入れる一子ちゃん。
彼女は薙刀を頭上で高速回転させる。
どうやら川神流の奥義でケリをつけるようだ。
そして薙刀の風圧でクリスティアーネのスカートがゆっくりとフワフワ浮き上がろうとしている。
「大事な瞬間だな」
「ああ、ここで勝利をもぎ取れるかはワン子次第なんだが……」
「おや? お二人共川神さんが負けると予想されるのですね」
「ああ、ワン子はミスを犯す」
百代の言葉と共に振るわれる薙刀の刃先は、クリスティアーネの足へと向かったが……。
クリスティアーネはそれを軽々と避けた。
そして、一瞬だけお目見えしたアヴァロン。

彼女のアヴァロンは純白だった。
「終わったな」
俺の言葉と共に繰り出される素早い突きによって肩を突かれた一子ちゃんは、敗北した。
「スゲー試合だった!!」
「感動したぜ!!有難う!!」
観客たちが二人に惜しみない拍手と歓声を送る。
しかし、すっかり終わりのムードは一子ちゃんの行動で木っ端みじんに粉砕される。
「クリス!!今度は本気でやろうじゃない!!」
そう、宣言をすると共に、装着していたリストバンドを外して地面に捨てる。
捨てられたリストバンドはズンという音を立てて地面に落ちた。
「な…あのリストバンド何キロあるんだ?
「今まであんなハンデを背負って戦っていたというのか!?」
終わりのムードからすっかり少年漫画の空気になるグラウンド。
俺的には初めから本気で戦えばいいのにと思う。
「あほかっ!もう勝負はついておるわ!」
「いたっ……!?じーちゃん…」

「情けない声を出してもダメじゃ!!初めから全力でいかんからこうなる」
一子ちゃんがアホをやらかして説教をされた後、なんやかんやで転入生はF組に歓迎され微笑ましい光景になった。
うんうん。仲がいいのはよい事だ。
仲良くなった一子ちゃんとクリスティアーネはあだ名を決めるようだ。
俺も混ざりたいぜ。
「えーと…クリスだから……クリ!!
「く、クリ?」
「ヤベェ立った!!」
俺も少し立った!!
「股間の反射神経凄すぎだろ……。
まぁ俺様もなんだがな」
「あの二人は相変わらずの変態だね。
サスケは…立たないよね?」
「立ってない」
少しだけだからセーフだ。
「ってヨンパチ!!今がチャンスじゃねか!?

「え？何が??」
「馬鹿っ！例の計画に決まっているだろう!!」
「おお!?そうだった!!」
　二人がお互いにクリと犬と呼び合うライバルになった所で島津とヨンパチと呼ばれた男が直江を連れて俺の前にやって来た。
　なんの様だろうか？もしかして写輪眼を使ってアヴァロンを見た事がバレたのか？
　そう思っていると……。
「うちはサスケぇ!!お前に決闘を申し込む!!」
「ん？」
　俺はヨンパチと呼ばれた男に決闘を申し込まれた。

5話

エロにかけてはカリスマを誇る男が俺に決闘を申し込んできた。
一体何なんだろうか？
FとSは仲が悪いが、俺は個人的に彼らに嫌われるような事はしていないはずだ。
「漢らしく受けろ!!もし、お前が俺に勝ったら……俺の大事なものをお前にやる!!」
大事なもの……。
あのエロの権化が大事にしている物……。
エロ本の事か!?
「…真剣のようだな……いいだろう。
その決闘を受けてやる」
ヨンパチの熱い言葉を察知した俺は、彼の熱意に負けた感を出しつつ、決闘を承諾する。
「待たんか！これ以上は授業に差し障る!!次の休みの時間にせい!!」
「学園長!!俺はうちはに勝ちたいんです!!男として!!男として!!
お願いします!!!!」

「おい……あのヨンパチの皮を被ったヤツは誰だ？
もしくは、エイリアンに体を乗っ取られたのか？」
今にも土下座しそうなヨンパチの熱意に困惑する周囲。
友人であるスグルやFクラスは彼は偽物ではないかと疑うレベルだ。
彼の事をそれなりに知っている爺さんは許可をするかしないかで揺れ動いていた。
「俺の覚悟は本物です!!どうか、これでお願いします!!」
「……うむ!! 許可しよう!!」
迷う鉄心にヨンパチの懐から渡された一枚の写真により決闘が承諾された。
審判はさっきと同様に爺さんが務める事になり決闘方法については、ヨンパチから提示された。
まあ、俺と物理で戦ったら一般人のヨンパチはすぐに敗北してしまうだろう。
故に、決闘方法は彼から提示された方法で受ける事になる。
その内容とは……。
「野球拳だぁあああ!!」
『は？』
「写輪眼禁止での野球拳!!パンツ一丁になるまで続けるんだ!!」
一瞬ヨンパチの言葉で周囲の時が止まるも、じわじわと内容を理解したギャラリーが

騒ぎ始める。
「なるほど……確かにこれなら条件は同じの五分五分だ」
「サスケのパンイチ……大事なものを捧げるサル…。
じゅるり」
「野球拳ってなに?拳で野球するの?」
「サルの後ろに弟が控えているからアイツの案なんだろうなぁ。
それと雪、野球拳と野球は一切関係ないからな」
「パンイチのサスケ君……大変です準。
半分立ってしまいました。
もし、直江君だったら襲っていますよ」
「若、少し落ち着こうか」
「野球拳とはまさに漢の勝負!!我が許可する!!うちはサスケ、あの男の服を剥ぎ取ってこい!!」
「流石、英雄様ーーー!!ぶれない姿勢に感服ですーーー!!」

☆ヨンパチ☆
ついに事の時が来た。

ヤドカリ軍師が考案した漢らしい、五分五分の勝負。
勝っても負けても、ヤツに一回でもか勝てば俺達の仲間がうちはをＳＯＧＥＫＩ！するように撮影する事になっている、明日には現像して学校中にバラまいてやるぜ!!
無様を晒すがいい…うちはサスケ!!
「さあ！勝負だ!!」
「始める前に言っておく…俺、ジャンケンに負けた事ないぞ」
「負け惜しみを言っていられるのも今のうちだぜ!!」
両手を組んで手と手の間をのぞいているうちは。
俺だって!!
「乳…尻…ふともも…エロスの神よ。
どうか我に力を与えたまえ」
両掌をついてエロスの神に感謝と祈りを捧げる。
これは、感謝のエロ祈祷。
朝、これを行った後に登校するとパンチラを撮影出来る素敵なご祈祷である。
「ジャン！」
「ケン！」
『ポン!!』

俺…パー
うちは…チョキ
くっ!!まだ一敗しただけだ。
上着を脱いでセコンドのガクトに渡す。
「大丈夫だヨンパチ。
ジャンケンは確率の勝負。
大和の話だと、どんなに強い奴でも必ず負けは来るんだ。
安心して行って来い！」
「ああ！」
「頑張れよー、サルー。今回だけはあたいはお前を応援するぜぇ!!」
「モンスター…じゃなかった、羽黒…」
「し、仕方ないわね……いつも見下してるSを見返すチャンスだし？
私も応援してあげるわよ？だからサスケ君の裸は任せるわ」
「……スイーツ」
いつもはキモイと罵る女子たちが優しい。
しかも、F組の女子たちだけではない。
上級生や下級生。

変な腹話術をする一年もサスケと一緒とセットではあるが応援してくれている。
「ここで負けたら男じゃねぇ!!」
うちはの待つ、フィールドに舞い戻った俺は魔王に立ち向かう勇者のような気分で対峙する。
同士の為、モテの為に俺は負けられない!!
「ジャンー!」
「ケン!!」
『ポン!!』
俺…グー
うちは…パー
「ちくしょぉぉぉぉぉぉ!!」
「まだだ、ヨンパチ!!まだお前には靴下がある!!」
「そうだ!!大和の言う通りに片方づつ脱いでいけば少しは時間が稼げるぞ!!」
セコンドの二人の指示に従い、靴下を片方脱いでガクトに渡す。
「サル!まだ、諦めるんじゃねぇぞ!!」
「そうよ!!諦めたらそこで試合終了よ!!」
こうして周りに応援されながらも連戦連敗を晒した俺。

周囲もかつての熱気は無くなっていた。
俺に残されたのはズボンのみ。
絶対絶命の状況だ。
ならば、ここで流れを変えてやる!!
自分でもバカだと思う考えにニヤリと笑う。
当然、降参なんてものは存在しない。
「…何を笑っている?もう後がないんだぞ」
「一番惨めで、苦しい時にニヤッと笑う…それが男だ!!
うちはサスケぇ!!俺は負けたら今日一日!!パンイチで授業を受けてやる!!」
「なん…だと?」
俺の笑いに問いを投げたうちはだったが、俺の答えと覚悟にヤツは後ずさる。
ギャラリーも俺の覚悟に驚愕の表情を見せる。
ジャンケンは心理戦でもある!!
ここで揺さぶって勝利をもぎ取ってやるぜ!!
「ヨンパチ!お前って奴は……」
「後は……頼んだぞ」
心配するセコンドの二人に後を任せた俺は、最終決戦に挑んだ。

「福本育郎。あまり威勢のいい言葉を遣うなよ……弱く見えるぞ」
「へっ!!そのスカした顔を驚愕に塗りつぶしてやるぜ!!」
こうして俺の決死の覚悟を抱いた戦いが始まった。
「ジャン!」
「ケン!」
『ポン!!』

……。
……。
……。
…。

この日、俺は学校での授業をすべてパンツ一枚で過ごした。
女子からはゴミを見る目で見られたが心地よかったので、結果的には良かったのかもしれない。